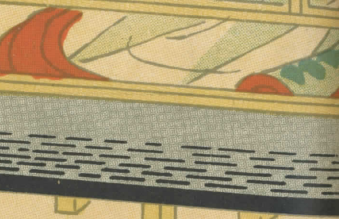


名作の十月興行

文樂座
人形
淨瑠璃



菊花霜に驕るの秋皆様にはいよく御清
 祥に被遊お欣び申上ます。日頃はなみ
 々ならぬ御厚情を賚はり有難く御禮申
 上ます。

さて。みなさまの文樂座もこの絶好の季
 節に入りて茲に勇躍晩秋を飾るにふさは
 しき絶体的名狂言「假名手本忠臣蔵」を
 大序より七ツ目まで打通しにて上演いた
 す次第で御座ぬます。これに巨頭精鋭の
 妍を竭し寔に醍醐味の極致を魅了してい
 たゞくもの、晩秋の一日まづこの郷土藝
 術の妙諦に蕩酔されんことをお希申上ま
 す。

昭和五年十一月一日

四ツ橋

文樂座

昭和五年十一月一日初日

初日・二日目 午後二時開幕
 三日目より 午後三時開幕

二日目よりの

・御観覧料・

一等椅子席 御一名——金三圓
 二等席 御一名——金一圓五十錢
 三等席 御一名——金八十錢
 一等お座席 御一名——金三圓五十錢

一等お座席
 一等椅子席 は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一—番
 専用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履
 はそのまゝ御入場出來ますからなるべく
 靴、草履でお越しを願ひます。

本誌カヘツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目
 長三〇八番
 四九四番
 一四九四番 } (44) 堀佐土

天藥堂 天藥堂 天藥堂

天藥堂 天藥堂 天藥堂

天藥堂 天藥堂

格之商 受利甚薄
醫藥之 醫藥之
醫藥之 醫藥之
醫藥之 醫藥之

能并第 能并第
能并第 能并第
能并第 能并第
能并第 能并第

下第 下第
下第 下第
下第 下第
下第 下第

前之 前之
前之 前之
前之 前之
前之 前之

由 由
由 由
由 由
由 由

動 動
動 動
動 動
動 動

身 身
身 身
身 身
身 身

簡 簡
簡 簡
簡 簡
簡 簡

力 力
力 力
力 力
力 力

心 心
心 心
心 心
心 心

云 云
云 云
云 云
云 云

三味線

三味線 三味線 三味線
三味線 三味線 三味線
三味線 三味線 三味線
三味線 三味線 三味線

六味 六味
六味 六味
六味 六味
六味 六味

天藥堂 天藥堂
天藥堂 天藥堂
天藥堂 天藥堂
天藥堂 天藥堂

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君

諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君
諸君 諸君



鶴ヶ岡兜改めより戀歌まで

(三時より三時三十分まで)

・御休憩時間幕間約十分間・

桃の井邸の段

(三時四十分より四時二十分まで)

下馬先進物の段

(四時二十分より四時四十分まで)

殿中双傷の段

(四時四十分より五時十分まで)

裏門の段

(五時十分より五時二十五分まで)

・御食事時間幕間約二十分間・

扇ヶ谷の段

(五時四十五分より六時四十五分まで)

霞ヶ關の段

(六時四十五分より六時五十五分まで)

・御食事時間幕間約二十分間・

山崎街道の段より二ツ玉の段まで

(七時十五分より七時五十五分まで)

身賣りの段より勘平切腹の段まで

(七時五十五分より九時まで)

・御休憩時間幕間約十五分間・

祇園一カ茶屋場の段

(九時十五分より十時三十五分まで)

(舞臺裝置 松田種次)



清水町濱興業の賑ひ

文樂今昔譚より

やはり文樂座が中心

社寺境内の興行禁止は、進運のスタートを切らうとしてゐる文樂座にまつて、ざれほど大打撃であつたか知れない。根據地を奪はれた天保の改革以來、ごういふ興行状態を續けたかさいふと、北堀江市之側、若太夫の芝居、を借りて、天保……弘化……嘉永……を經てゐる。さうして安政元年一月から西横清水町濱の新埋立地に座を建て、漸やく、自分の家らしいものに戻つて來たが、もちろん永久的のものでは無かつた。けれどもその興行ぶりはなかく盛んなもので、常に有名な太夫を巧みに招聘して、斯界の先頭に立つてゐたことは疑ひを容れない。かうして此新興行地に約三ヶ年居据つてゐたが、時代と共にさしも嚴酷であつた禁

令もやうやく弛んで來たのを見てまつて、文樂座主植村翁はもこの稻荷境内へ復歸を願ひ出で、許されて、安政三年九月、再び舊地に櫓を上げることが出來た。同九日初日。『鬼一法眼三略卷』『芦屋道滿大内鑑』櫓下の長登太夫が菊畑。湊太夫が大藏卿館。春太夫の葛の葉子別れ。これは無論大盛況。文樂座はかうして次第に確實な地盤を築きながら明治の時代に入つて行く。さて明治に入るまでに、ちよつと此時代を低徊して見て（天保より明治まで）おもしろい出來ごさ、淨瑠璃界の變轉を知つて貰ふに必要なことだけを拾つて行くごさとする。

その一つは、清水町濱の興行地のことである。

この濱は天保十二年、西横堀の川幅を狭めて、その東岸を埋立てた新築地。地固めの爲めに興行物を許されたのであつた。上繫橋（四つ橋）から道頓堀に至る炭屋橋以南の濱地、南北炭屋町の部分がそれである。

淨瑠璃興行が始めて此土地で行はれたと思はれるのは宮芝居禁止から程なく、弘化二年二月。その頃の番附による、『清水町濱新築地にて』と記して、梶、むら咲、太夫の連中で、『二十四孝』と、それから特に此興行の爲めに書卸されたと思はれる『西横堀築地賑。浪花名所記』を出してゐる。惣塚場といふ一幕をチャリ語りの名人として聞こえた津賀太夫（後に日本第一滑稽物語竹本山城掾となつた人）が勤めてゐるところを見る、おそらく、此時が此土地の拓けた始めで、淨瑠璃座の始まりでもあつたのであらう。さうして此築地はすつと明治へかけて、道頓堀についての繁昌地になつてゐたことは想像するに難くはなく、説教、祭文、淨瑠璃、歌舞伎芝居、講釋、新内、すらりさ並んで見世物や金比羅さんの出し店も賑ふ。と云つたやうな状

態である。文樂座のかゝつた位置はどの邊りかといふと、今の御池橋東詰を南に入りスグ濱側の芝居の横を新築地に曲つたところに西に面して建つてゐた。清水町濱といふ名稱は、即ち御池橋から木綿屋橋までの間をさしての名稱で、此の方四つ橋炭屋橋の間にも芝居見世物はあつて、名高い熊の席なども炭屋橋の詰にあつた。けれども木綿屋橋から南道頓堀川までの間には興行物は無かつたらしい（古老の話）。

この清水町濱興行の時代に、吉田文三郎以來の名人としてこの濱興行の人氣者として聞こえた吉田玉造にかゝる、一つ二つの挿話がある。また二十歳にも足らぬ青年人形遣ひであるが、これもやはり天保の改革に觸れて、人形を遣ふことを禁ぜられて、その天才を惜しまれてゐた頃のこと。そんな改革に觸れるほど此玉造が他の多くの人形遣ひと同じやうに墮落したか、或は風俗を紊してゐたか、それは知らぬが、おそらく、同じ道に在るものとして、共にこの禁制の中に連座したのであらうと思ふが、その邊はハツキリわからない

けれども、この玉造がそんな人物と思はれない點は、かうして禁制の掟を人形遣ふ腕におろされてゐても、一時もちつとしてゐることが出来なくて、ひそかに或る一案を案出して、舞臺へ出ることを試みた。苦心を凝らした彼れの新案まはごんなものであつたかといふと、切抜き繪の押し繪を竹の竿の先に張りつけた人形で、これをいつもの人形の代りに操るのである。けれどもこれとても、もごより人形を遣ふこと即ち舞臺へ出ることを禁ぜられてゐる玉造が平氣で舞臺へ出られる筈はない、無論監視の役人の目を掠めてやつてゐる仕事である。兼て謀し合はしてあるので、木戸番の男は役人の姿がそこらに見へると、すぐ舞臺へ合圖をする。さうするご人形は忽ち影をひそめる。さかういふ手段で毎日くりかへしてゐたのだが、こんな埒もない急拵らへの變てごな人形でも吉田玉造が使つてゐるご見物はすっかり得心してしまつてゐて、『さながら生きた歌舞伎芝居のやうだ』といふ評判。何が人氣になるかわからないものである。ごころが、此まゝこれが

役人の耳へ入られば萬歳だがさうばうまく行かない。評判が高くなるにつれて、役人の目は光る。ごうく玉造は捕はれた。牢獄へ入れられるごいふ騒ぎであるだが幸ひに玉造を惜しむ周圍の人々は百方これを嘆願して、やうく罪を免れることが出来た。

もう一つの話！

玉造はその頃、新町の扇屋の主人三郎兵衛にひぬきを受けてゐた。三郎兵衛は人形芝居に非常に趣味をもつてゐて、巧みに人形を遣ふばかりが自身で人形の頭を彫り上げることを樂しみにしてゐるほどで、時々太夫衆の流れ場（座敷の眞中に廊下のやうな板間をこしらへて通ひ路にした處）へ舞臺をこしらへたりして人形芝居の催しをして、太夫や家内中の者に見せてゐた（孫にあたる中村鴈治郎の話では後に文樂を模造したやうな人形舞臺を作つてゐたごいふことである。なほ三郎兵衛遺愛の人形は古びた衣裳と共に同家に保存されてゐる。

ある年の正月、三郎兵衛は太夫衆や家内の人達を慰

める爲め、親類縁者を招いて人形芝居の催しをするこ
こになつた。そこで、日ごろひきゐる玉造を招んで、
自分の遣ふ人形の左手を手傳はせやうと考へたが、困
つたここには廓の中へは藝人は一切出入することなら
ぬといふ掟があつた。そこへ氣のつかぬ三郎兵衛では
なかつたが、どうでも玉造に遣はして見たかつたので
一策を案じて玉造を茶の友人さいふこことして、ヨッ
ソリと呼びよせて置いた。やがて主人は三番叟を遣ひ
玉造は左手をもつて舞臺へ現された。無論誰れ一人黒
衣を着てゐる玉造が解る筈がないと思つてゐるこ
見物の中に交つてゐた當時全盛の若紫太夫がこれを看
破して、あれは藝人に違ひない、と云ひ出して、太夫
は家内の者に注意をした。皆は三郎兵衛に諫言をした
廓の掟で藝人の出入を禁ぜられてゐるばかりか、ここ
に改革令以來藝人の取締が一層やかましくなつてゐる
のだから、萬一その筋の目に止つたら、それこそ、ど
んなことなるかも知れない、萬一一家名が疵つくやう
なことがあつてはならないから、と注意したので、三

郎兵衛もさうと氣附いて、芝居はそのまゝで中止をす
ることになつた。さうして玉造には記念として、その
時使つた三番叟の人形（三郎兵衛が壹年間苦心して自
作したさいふ頭）をそのまゝ與へて歸へすことになつ
たので、若紫太夫も關はり合の一人として、此日の催
しを惜しんで、玉造さば知らずに貸してゐた袴（これ
は緋鹿子友染縮緬の扱帶）を記念として贈ることにな
り、まづは無事に濟んだ。玉造は此二品を生涯の思出
として死に至るまで自宅の床の間に飾つてゐたさうで
ある。



假名手本忠臣藏

大序より

一力茶屋場の段まで

鶴ヶ岡兜改めより

戀歌の段まで

- 足利直義 竹本町太夫
- 堀谷判官 豊竹つげめ太夫
- 顔世御前 竹本南部太夫
- 桃井若狭之助 竹本浪花太夫
- 高野師直 豊竹和泉太夫

鶴澤園 六叶

この「假名手本忠臣藏」は寛延元年八月の（今から百八十二年前）竹本座の操にかけられたもので、竹田出雲が正、三好松洛、並木千柳等が補で書下された日本演劇史を以表する最大傑作である。

足利將軍尊氏公は新田義貞を討つてその兜を鶴ヶ岡八幡宮に奉納するに就て今日社頭に兜改めが行はれたが、堀谷判官の妻顔世御前は曾て兵庫司の女官を勤めた故兜改め役として召され多くの兜の内、焚きしめた蘭奢待の名香に直にそれを見分けた。

女好きの高野師直は和歌に事よせて顔世に艶書を送る。短氣な桃井若狭介と意地悪な高野師直と大に論を始め、あはや神前に鯉口を切る所を僅に事なく済む。桃井は師直その口論に無念やる方なくお家斷絶を覺悟の上、殿中で刃傷に及げん決心を家老の加古川本藏に打ち明けた。本藏は分別者で、疝癰の殿に逆はず松の枝をすつぱりさ切り落し殿の疝氣を走る所まで行かせてつと脇へ外らす手段を講じた。

この度將軍家接待の役目を承つたのは堀谷と桃井とその禮儀作法萬般の師範役は高野師直である。殿中で桃井が師直に會ふと平伏せんばかりに下に出たので怒も何處へやら消えてしまつた。これは本藏の深慮で賂賄

人形

足利直義 吉田玉徳

壘谷判官 吉田玉松

高野師直 吉田小兵吉

桃井若狹之助 桐竹紋十郎

顔世御前 吉田文五郎

大名 大ぜい

仕丁 大ぜい

を贈つたからである。壘谷からは賂賄がない上に顔世に對する戀の憎みがある。師直は壘谷を殿中で散々に苛め恥しめた。短氣の壘谷は前後を辨へず鯉口切つて師直を斬りつけた。後から抱き止めたのは本藏であつた。殿中で及傷に及んだ壘谷判官は切腹を申しつけられてお家斷絶といふことになつた。此處に忠臣と不忠臣との色分けが見えた。家老大星由良之助は深い分別を以つて速る若武者を鎮めて城を明け渡し悄然と山科へ去る。金に眼の眩んだ壘谷の不忠臣斧九太夫の子定九郎は浪人の生計に困つて、山崎街道で夜盜を働き通りかゝつたお輕の父與一兵衛はお輕を勘平の爲に身を賣つた金子五十兩と命もろこも定九郎の爲に奪はれ

た。猪撃ちに出た勘平の二つ彈丸は誤つて、美事に定九郎に當る。奪つた縞の財布の五十兩は計らず勘平の手に入る。歸りが遅いと案じられた與一兵衛の宅へはその死骸がかつき込まれた。勘平は縞の財布をそつと取出して見て昨夜闇まぎれに撃つたのは舅と早合點した。姑お萱もそれを推して怒り歎く。勘平はたさひ主君の仇討ち御用金調達の爲さば言へ現在の舅を殺して金子を取つた事言譯立たず、面目なさに切腹した。其處へ千崎彌五郎、原郷右衛門の兩士が来て刀傷と鐵砲傷は違ふと勘平の冤罪は暗れ臨終に一味の血判状へ加へられた。由良之助は敵討ちの本心を包んで祇園の力茶屋にお輕を相手に日毎放埒な浮れ酒、九太夫は

敵の謀者となつて大星の本心をうか
いふ。力彌が持参した顔世御前から
の密書を大星が讀んでゐるさお輕が
二階でのべ鏡、九太夫は縁の下から
眼鏡越しにのぞく。大星は大事を知
つたお輕の一命を兄平右衛門に命じ
て取らうとしたがその真心が見へた
ので助けた。お輕は九太夫を刺して
勘平の身替りに功を立てるさお破
亂曲折の裡に日本武士道の精華を語
るさおふ不朽の名作です。

(床本) 鶴ヶ岡兜 改め

より戀歌迄

頭後にかほよばつきほなく師直様は
今暫し御苦勞なむらお役目をお仕舞
有ておしづかにお暇の出たこのかほ
よ長居は恐れおさらばさ立上る袖師

摺寄てじつこ扣へコレまあお待ち待
たまへけふの御用仕廻次第其元へ推
参して、お目にかけるものが有幸ひ
のよい所召出された直義公は我爲の
結ぶの神御存じのごさく我等歌道に
心を寄せ吉田の兼好を師範と頼み日
々の状通其元へ届けくれよご問合せ
の此書状いかにもこの御返事は口上
でも苦しくないさ秋から秋へいるい
結び文顔に似合ぬ存参る武歳鑑と書
たるを願見るよりはつご思へ共はし
たのふ恥しめて却つて夫の名の出る
こと持歸つて夫に見せふかいやく
夫では壙谷殿憎しと思ふ心から怪我
過にもならふかさものを言はず
投返す師人に見せじご手に取上げ戻
すさへ手にふれたりと思ふにぞ我ふ
みなから捨も置れずくごうは言はぬ

よい返事聞まではくごいてくご
き拔天下を立ふさふせふ共儘な師直
壙谷を生ふご殺さふ共かほよの心た
つた一つ何んごそふでは有まいかご
願聞にかほよが返答も涙ぐみたる斗
りなり折から來合はす若狭之助例
の非道ご見て取氣轉かほよ殿まだ退
出なされぬかお暇の出で隙取は却て
上への恐れ早お歸りご追立てば師
やつ扱はけごりしご弱味をくはぬ高
野師直ヤア又しても言はれぬ出過ぎ
たてよければ身が立たす此度の役目
首尾よふ勤めさせくれよ壙谷の内
證かほよの頼みそふなくてはかなは
ぬ管大名でさへあの通り小身者に捨
知行誰か陸で取らす師直も口一つ
で五器提ふも知れぬあぶない身代夫
でも武士ご思ふじやまでご邪魔の返

桃井邸の段

口 (竹本長子太夫 竹本陸路太夫)

鶴鶴鶴 澤澤澤 友友寛 二作市

切 竹本文字太夫 野澤勝平

人形

娘 小 浪 吉田文之助
 妻 戸 無 瀬 吉田扇太郎
 加古川本藏 吉田玉治郎
 大星力彌 桐竹紋太郎
 桃井若狭之助 桐竹紋十郎

報にくて口若くはつこせき立若狭之助刀の鯉口碎る程握り詰は詰たれ共神前なり御前なりと一旦の堪忍も今一言も生死の詞の先手還御ぞと御先を拂ふ聲々に詮方なくも期を延す無念は胸に忘れず悪事悖て運強く切れぬ高野師直を判あすは我身の敵共知ぬ搦谷も後押へ直義公は悠々こ歩御我賜ふ御威勢人の兜の龍頭御藏に入る数にも四十七字のいろは分かぬの兜を和らげて兜頭巾のほころびぬ國の掟ぞ、久方の

(床本) 桃井邸の段

空も彌生のたそがれ時桃の井若狭之助安近の館の行儀はき掃除お庭の松も幾千代を守る館の執權職加古川本藏行國年も五十の分別盛り上下ため

付け書院先、あゆみくる共白洲の下人ナント關内此間はお上にはでつかちないお拵へ都からのお客人きのふは鶴ヶ岡の八幡へ御社参おびたしいお物入ア、其銀の入り目がほしい其銀が有たら此可介名を改めて樂しむにア何んじや名を改めた樂しむまば珍らしいそりや又何んぞ替るハテ角助も改めて胴を取て見る氣ナニばかつらなわりや知らないかきのふ鶴ヶ岡で是の旦那若狭之助様いかふ不首尾で有つたげな仔細はしらぬが師直殿も大きな恥をかかせたご奴部屋の噂定めて又無理をぬかしてお旦那をやりこめおつたで有ささかなき口々ヤイ、何をさば、こやかましいお上の取ざた殊に御前の御病氣お家の恥辱に成る事有らば此本藏聞

流し置べきや禍は下部の嗜み掃除の
 役目仕廻たか皆いけくそ和らかに
 女小姓も持出るたばこ輪をふく雲を
 ふく廊下音なふ衣の香や本藏おぼん
 さうの一人娘の小浪御寮母のさなせ
 諸共にしこやかに立出ればははく
 兩人共御前のお伽は申さいで自身の
 遊びか不行儀千萬イエく今日御
 前様殊の外御機嫌今すやくそお休
 夫でナア母様イヤ申本藏殿先程御前
 の御物語きのふ小浪も鶴ヶ岡へ御代
 参の歸るさ殿若狹之助様高野師直殿
 こ誂諷ひ遊ばせしこの御噂たがいふ
 さなくお耳に入りそれはくきつい
 お案じ夫と本藏仔細くはしく知りな
 ら自に隠すのかやとお尋れ遊ばす
 故小浪に様子を尋ねれば是もわたし
 と同じこそ何にも様子は存じませぬ

このお返事御病氣のさばりお家の恥
 に成る事ならアこれくそなせ夫
 程のお返事なせ取締ふて申上げぬ主
 人は生來御短慮なるお生れ付何の詞
 諷ひなごは女わらへの口ぐせ一言
 半句にても舌三寸の誤りより身をは
 たすむ刀の役目おみも武士の妻でな
 いか、それ程の事に氣も付かぬか嗜
 めさくナニ娘そちば又御代参の道
 すから左様の噂はなかりしか但し有
 たかナニないチ、其苦くハハハハ
 何のべしでもない事をよしく奥
 方のお心休め直きにお目にかへらん
 こ立上る折こそあれ當番の役人罷り
 出大星由良之助様の御子息大星力彌
 様御出なりご申上るム、お客御馳走
 の申合せ判官殿よりのお使ならんこ
 なたへ通せコレこなせ其方は御口上

請取殿へ其通り申上られよお使者は
 力彌娘小浪さ言號の鞆殿御馳走申し
 やれ先奥方へ御對面さ言捨一間に入
 にける。こなせは娘を傍近くなふ小
 浪さ、様のかたくろしいは常なれど
 今おつしやつた御口上受取る役はそ
 なたにさ有りそな所をこなせにさは
 母が心さはきつい違いそもじも又力
 彌殿の顔も見たがる逢たがる母にか
 はつて出むかや、いやか、問返
 せばあい共いや共返答はあからむ顔
 のおぼこさよ母は娘の心を汲アイタ
 り娘せなを押へたも是はなんご遊ば
 せしと狼狽騒げばイヤなふけさから
 の心づかひ又持病の癪が指込んだ是で
 はごふもお使者に逢はれぬアイタ、
 娘太儀ながら御口上も受取り御馳走
 も申したもお主と持病には勝れぬ

くそろくこ立上り娘や随分御馳走申しやしたか餘り馳走すぎ大事の口上忘れまいそわしも御殿にアイタ、あいたからうの奥様は氣を通してぞ奥へ行小浪は御後伏拜みく忝い母様日頃戀し床しい力彌様あはゞごふいをかういをこ娘心のぎんぐと胸に小浪を打寄する疊ざはりも故實を糺し入來る大星力彌まだ十七の角髪や二ツ巴の定紋に大小立派さはやかに遠大星由良之助が子息と見へし其器量しづくと座に直りたそお取次頼み奉るご懸念に相述べ小浪は、つご手をつかへじつと見かはず顔と顔互いの胸に戀入る物も得いばぬ赤面は梅と櫻の花相撲に枕の行司なかりけり小浪やうく胸押しづめははく御苦勞千萬によふこ

そお出只今の御口上受取役は私御口上の趣をお前の口からわたしが口へ直きにおつしやつて下さりませと摺寄ば身をひかへハア是はく不作法千萬惣じて口上受取り渡しは行儀作法第一と疊をさかり手をつかへ主人彌谷判官より若狹之助様への御口上、明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈の所定めてお客人も早々にお出あらん然れば判官若狹之助兩人は正七ツ時に屹度御前へ相詰よご師直様より御仰せ萬事間違ひのなき様に今一應御使者に參れご主人判官申付け候故右の仕合せ此通り若狹之助様へ御申し上げ下さるべしと水を流せる口上に小浪はうっかり顔見これさかふ諾もなかりけり、聞た

昨日お別れ申してより判官殿間違ふてお目にかへらす成程正七ツ時に貴意得奉らん委細承知仕る判官殿にも御苦勞千萬と宜しく申し傳へてくれられよお使者太儀然らばお暇申し上げんナニお取次の女中御苦勞ごしづく立て見向きもせず衣紋繕ひ立歸る本藏一間より立かへりハア殿是に御入り彌々明朝は正七ツ時に御登城御苦勞千萬今宵も最早九ツ暫く御まごろみ遊ばされよ成程くイヤ何本藏其方にちご用事有密々の事小浪を奥へくハアコリヤく娘用事あらば手を打ふ奥へくご娘を追やり合點の行ぬ主人の顔色ご御傍へ立寄先程よりお伺ひ申さんご存せし所委細具に御仰下さるべしとさしよればイヤナニ本藏今此若狹之助が言出す一

言何に寄らず畏り奉るる言と
返さぬ誓言聞ふハア是はく改まつ
た御詞畏り入り奉るではござれ
共武士の誓言はならぬといふのかイ
ヤ左にあらす先委細まつくも承は
り仔細を言はせ後で異見かイヤ夫は
詞を背くかサア何さハツはつこ斗り
指うつむき暫く詞なかりしが胸を極
めて指添抜かたへにかたなぬきはな
してうくく金打し本藏が心底
かくの通りさめめ致さず他言もせ
ぬ先づ思し召しの一通りおせきな
れず本藏めが胃の腑に落ち付く様
にさつくりと承はらん相述るム
一通り語つて聞かせん、此度管領
足利左兵衛督直義公鶴ヶ岡造營故此
鎌倉へ御下向御馳走の役は摺谷判官
参兩人承はる所に尊氏將軍よりの

仰せにて高野師直を御添人萬事彼が
下知に任せ御馳走申上げよ年ばいと
言い諸事物馴れたる侍と御意に隨
ひ勝に乗つて日頃の我儘十倍増都の
諸武士並居る中若年の某を見込み
雑言過言眞二つに思へ共御上の仰
せを憚り堪忍の胸を押へしは幾度明
日は最早や丁簡ならず御前にて恥面
かゝせる武士の意地、其上にて討つ
て捨る必ず留るな日頃某を短慮成
りさ奥を始め其方が異見幾度か胸に
まつく合點なれ共無念重る武士の
性根家の斷絶奥が歎き思はんにては
なけれ共刀の役目弓矢神への恐れ戦
場にて討死はせず共師直一人討つて
捨れば天下の爲家の恥辱にはかへら
れぬ必さ短氣故に身をばたす若狹之
助猪武者ようたへ者さ世の人口

を思ふ故汝にまつく打明すと思ひ
込だる無念の涙五臓を貫く思ひなる
ム、よふ譯をおつしやつたよふ御了
簡なされた此本藏なら今迄了簡はな
らぬ所ヤイ本藏ナ、何んと言つた今
迄はよふ了簡した堪忍したさはわり
や此若狹之助をさみするか是はお詞
共覺へす冬は日かげ夏は日面よけて
通れば門と中かにて行違の喧嘩口論
ないさ申すは町人の誓へ武士の家で
は杓子定規除て通せばほうずかない
さ申すのむ本藏めが誤りか御詞さみ
致さぬ心底御覽に入んさ御傍のちい
さ刀拔より早く椽ん先きの松の片枝
すつばさ切つてサア殿まづ此通りに
さつばつと遊ばせんいふにや及ぶ
人や聞く邊に氣を付今夜はまだ九
ツくつたりと一休枕時計の目覺し

下馬先進物の段

豊竹島太夫
鶴澤友友造
平

人形

高野師直 吉田小兵吉
加古川本藏 吉田玉治郎
鷺坂伴内 桐竹紋十郎
腰元おかる 吉田文五郎
早野勘平 吉田榮三

本藏めがしかけ置く早く、チ、
聞入れ有て満足せり奥にも逢ふて餘
所なむらの暇乞モウ逢はぬぞよ本藏
さらばくと言捨て奥の一間に入賜
ふ武士のいきぢは是非もなし御後か
げ見送りく勝手口へ走り出本藏
家來共馬引け早くさいふ間もなくも

いだちしやんさりしげに御庭に引
出せば椽よりひらりま打乗て師直の
箱迄つゞけやつゞけ乗出す響にす
がつてみなせ小浪コレくごこへ始
終の様子は聞ました年こそよれ本藏
殿主人に御異見も申さず合點行かぬ
留ますと母と娘がぶらんく響に
纏留むればヤア小差出た主人のお命
お家の爲思ふ故に此時宜必ず此事殿
へ御さた致すな御耳へ入つたら娘は
勘當さなせば夫婦の縁を切る家來共

後にて諸事を言付んそこ退兩人イヤ
くくくシャ面倒なご鑑の端一ご當
はつしご當られてうんご斗にのつけ
に反を見向もせず家來續けご馬煙追
立打立方足踏立てこそかけり行く。

(床本) 下馬先進物の段

足利左兵衛之督直義公關八州の管領
と新に建し御殿の結構大名小名美麗
をかざる公装束鎌倉山の星月夜と袖
を列る御馳走にお能役者は裏門口表
御門はお客人御饗應の役人衆正七ッ
時の御登城武家の威光を耀ける。西
の御門の見付の方ハイくくくさい
かめしく提灯てらし入來るは武藏守
高野師直權威を現す鼻高々花色模様
の大紋に胸に我慢の立鳥帽子家來共
を役所くに残し置下部僅に先を拂

はせ主の威光の召おろし鱈の眞似する鷺坂内肩ひぢいからし申しお且那今日の御前表も上首尾く搦谷で候のイヤ桃ノ井で候のさ日頃はさつばさつばさごしめけご行儀作法は豹をやれへ上た様で去りさばく腹のかはイヤ夫に付きかれんく搦谷が妻かほよ御前いまだ殿へ御返事致さぬ由お氣にはさへられな器量ばよけれご氣か叶はぬ何んの鹽谷づれご當時出頭の師直様ミヤイく聲高に口利な主有かほよ度々歌の師範に事寄せくごけ共今に叶へぬ則ち彼が召使かるさいふ腰元新参ご聞きやつなこま付け頼で見ん、扱まださりへが有るかほよが誠にいやならば夫鹽谷に仔細をぐばらりご打明ける所を言はぬは樂しみさ、四ッ足門のかたかけに

主従駄頭咄し合折も有れ見付に控へし侍あはたしく走り出我々見付のお腰かけに控へし所へ桃ノ井若狹の助家來古川本藏師直様へ直きに御目にかいらん爲早馬にてお屋敷へ参つたれ共早御登城是非御意得奉らんご家來も大勢召連れたる体いかい斗ひ申さんやご聞くより件内騒ぎ出し今日御用の有師直様へ直きに對面さば推参也某直談さ走り行を待てく件内仔細は知れた一昨日鶴ヶ岡にての意趣ばらし我手を出さず本藏めに言い付け此師直が威光の鼻をひしひん爲ハ、ハ、件内ぬかるな七ッにはまだ間もあらんこれへ呼び出せ仕廻てくれん成程く家來共氣を配れご主従刀の目釘をしめし手ぐすね引て待ちかけ居る詞に隨ひ加古川本

藏衣紋繕ひ悠々ご打ち通り下部に持せし進物共師直が目通りに並べさせ遙下つて躡りハア憚りながら師直様へ申し上げ奉る此度主人若狹の助尊氏將軍より御大役仰付けられたる段武士の面目身に餘る仕合若輩の若狹の助何んの作法も覺束なくいかいあらんご存る所に師直様萬事御師範を遊ばされ諸事を御引廻し下され候段首尾能御用相勤るも全く主人が手柄にあらす皆師直様の御執成ご主人を始め奥方一家中我々迄も大慶此上や候べき去るによつて近頃些少の至りに候へ共右御禮の爲一家中よりの送りものお受遊ばされ下さらば生前の面目一入願ひ奉る則ち目録御取次ご件内に指出せばふしぎそふにそつご取り押開き目録一つ巻物三十

本黄金三十枚若狹之助奥方一つ黄金
二十枚家老加古川本藏同十枚番頭同
十枚侍中右の通りと讀上ぐれば師
直は明いた口ふさぐれもせずつこ
り主従顔を見合せて氣抜けの様に
きよるりつと祭の延た六月の晦日を
見るがごごくにて手持不沙汰に見へ
にける。俄に詞改めて是は
悼入たる仕合、件内こりやごふ
した物ハテ扱てハアお辭宜申さばお
志しに背くといひ第一は大きな不
禮、エ、式作法を教るもこんな折
にはさんごこまるナニものぢやはイ
ヤハヤ本藏殿何の師範致す程の事も
ないがさかくマア若狹之助殿は器用
者師範の拙者及ばぬくコリヤ件内
進物共皆々取納めエ、不行儀な途中
でお茶さへ得進んぜぬと手の裏返す

あいさつに本藏が胸算用してやつた
りも猶も手をつき最早七ツの刻限早
やお暇殊に今日は猶公の御座敷彌
主人の儀御引廻し頼み存るご立んご
する袂を控へハテあいかいの貴殿も
今日の御座敷の座並拜見なされぬか
イヤ陪臣の某御前の恐れ大事ない
此師直が同道するに誰がづこ
いふ者かい殊にまた若狹之助殿も何
ぞれかそれ小用の有物ひらにくご
進められ然らば御供仕らん御意を
背くは却て不先禮づおさきへご後に
付き金で面はる算用に主人の命も買
ふて取る二一天作十露盤のけたを違
へぬ白鼠、忠義忠臣忠孝の道は一ご
筋眞直に打連れ御門に入にける。程
も有らさず入り来るは壙谷判官高定
是も家來を残し置き乗物道に立てさ

せ譜代の侍早野勘平、朽葉小紋の
新袴ざはんくざはつく御門前壙谷判
官高定登城成りさ音なひける。門番
罷り出先き程桃井様御登城遊ばされ
御尋、只今又師直様御越しにて御尋
早御入ご相述るナニ勘平最早皆々御
入ごや遅なかりし残念ご勘平一人御
供にて御前へこそは急ぎ行奥の御殿
は御馳走の連誦の聲播磨がた、高砂
の浦に着にけりくうたふ聲々門外
へ風が持てくる柳かけ其柳より風俗
はまけぬ所体の十八九松の縁のほそ
眉もかたい屋敷に物馴しきごく帽子
の後帯供の奴が提灯は壙谷が家の紋
所御門前に立休らひコレ奴殿やめて
もふ夜も明けるこなた衆は門内へは
叶はぬ爰からいんで休んでやご詞に
隨ひナイくご供の下部は歸りける

内を覗いて勘平殿は何してぞごふぞ逢ひたい用お有るご見廻はす折から後かげちらご見付けおかるじやないか勘平様逢たかつたによふこそくム、合點の行ぬ夜中さいひ供をも連す只一人さいなあ、爰迄送りし供の奴は先へ歸した。わし獨り残りしは奥様からの御使ごふぞ勘平に逢て此文箱判官様のお手に渡しお慮外ながら此返歌をお前のお手から直きに師直様へお渡しなされ下さりませと傳へよ併お取込の中間違ふまい物でなしマア今宵はよしにせふさのお詞わたりしはお前に逢いた望何の此歌の一首や二首お届なさるゝ程の間のない事は有るまいとつい一走りに走つてきたア、しんどやご吐息つく然らば此文箱旦那の手から師直様へ渡せ

ばよいじや迄どりや渡してこふ待つて居いさいふ中に門内より勘平く判官様が召しまする勘平くハイハイく只今それへエ、せばしないと袖ふり切つて行後へ鱈ふむ足付き鷺坂伴内なんさおかる戀の智恵は又格別勘平めさせくつて居る所を勘平く旦那がお召と呼んだばかりつかく師直様もそもじに頼みた事があるとおつしやる我等はそなたにたつた一度君よく抱付くを突飛しコレみだらな事遊ばすな式作法のお家に居ながら狼藉千萬あた不法法なあた不行儀ごつき退ればそれは難面くらがり紛れについちよこくご手を取争ふ其中に伴内様く師直様の急御用伴内様くご奴二人かうろく眼玉でこれはしたり伴内

様最前から師直様も御尋れ式作法のお家に居ながら女を捕へあた不行儀なあた不法法ご下部ご口々エ、同じ様に何ぬかす頼ふくらして連れ立行。勘平後へ入かばり何んご今のはたらき見たか伴内めご一つばいくらふてうせおつた。おれもきて旦那も呼ばしやるご言ふさおけ古いごぬかすも面倒さに、奴共に酒吞せ古いご言はさぬ此術ハ、ハ、ハ、まんまご首尾は仕課たサア其首尾序になちよつごくご手を取ればハテ扱はづんだマアまちやいの。何いはんすやら何の待事が有ぞいなア、もふ頓て夜も明けるわいな、せひにくにせひなくも下地は好なり御意はよし。それでも爰は人出入奥は諸の聲高砂せうこんによつてこしをすればアノ諸で

殿中又傷の段

切豊竹駒太夫

鶴澤重造

人形

桃井若狹之助 桐竹紋十郎

高野師直 吉田小兵吉

茶道珍才 吉田市松

壺谷判官 吉田玉松

加古川本藏 吉田玉治郎

思ひ付たイザこしかけてさ手を引合
打連れて行。

(床本) 殿中又傷の段

脇能過て御樂屋に鼓の調へ太鼓の音
天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公御機
嫌斜ならざりける。若狹之助は兼て
待つ師直遅しと御殿の内奥を窺ふ長
袴の紐しめくまり氣配し儕師直眞ッ
二つさ刀の鯉口息を詰め待つ共知ら
ぬ師直主従遠目に見付け是は若狹
狹之助殿扱々お早い御登城イヤハヤ
家折りました。我等閉口イヤ閉
口序に貴殿に言譯致しお詫申事も有
るさ兩腰ぐばらりご投出し若狹之助
殿改めて申さればならぬ一通り日外
鶴ヶ岡で拙者が申した過言チお腹
が立つたで有るふ尤じやわそこを

お詫、其時はごふやらした詞の間違
ひでつい申た我等一生の重愆武士が
コレ手をさげる眞びら〜假令其元
が物馴れたお人なりやこそ外々の狼
藉者で見さつしやれ。此師直眞ッ二
つこばや〜有やうが其節貴殿の後
かげ手を合して拜ましたアハ〜ア
一年寄るさやくたい〜年にめんじ
て御免〜コレサ〜武士が刀を投
げ出し手を合す。是程に申すのを聞
入れぬ貴公でもないはさ。さかく幾
重にも誤り〜件内さ〜にお詫
〜さ金お言はする追蹤さは夢にも
しらぬ若狹之助力きみし腕も拍子抜
今さら抜に抜かれもせず寢又合はせ
し刀の手前さしうつむきし思案顔小
柴のかげには本藏が、嘘もせずまも
り居る、ナニ件内此壺谷はなげ遅い

若狹之助殿はきついで違ひ扱々不行
 儀者、今において煩出しせぬまが主
 なれば家老で候進諸事に細心のつく
 やつが一人もないイザ、若狹之助
 殿御前へ御供致そ、サアお立ちなさ
 れ、サアサア師直め誤つておるぞ
 コリヤ爰な粹め、粹様めイヤ若狹
 之助最前からち心悪ふござるマア
 先へ何さした、腹痛かコレサ件内
 お脊、お薬進じよかなイヤ、そ
 れ程にもござらぬ然らば少しの内お
 寛御前の首尾は我等がよい様に申
 し上る。件内一間へお供申せ、ミ主
 從寄つてお輩に迷惑ながら若狹之
 助は是思へど是非なくも奥の一間
 へ入りければア、もふ築じやミ本藏
 は天を拜し地を拜しお次の間にぞ控
 へ居る。程もあらさず盃谷判官御前

へ通る長廊下師直呼びかけ遅し、
 何ぞ心得てござる、今日は正七時
 迄先刻から申し渡したでないか成程
 遅なかりしは不調法、去りながら御
 前へ出るはまた間もあらんぞ、秋よ
 り文箱取出し最前手前の家來が貴公
 へお渡し申くれよ、則奥かほよ方
 より参りしと渡せば受取成程、イヤ
 ヤ其元の御内室は扱々心懸かござる
 は手前が和歌の道に心を寄するを聞
 き添削を頼むと有る定て其事ならん
 ぞ押開きさなきだにおもきが上のさ
 よ衣我つまならぬつまな重れそハア
 是は新古今の歌此古歌に添削さばム
 一、思案の内我戀の叶はぬ證扱
 は夫に打ち明しと思ふ怒をさあらぬ
 顔判官殿此歌御らふじたでござらふ
 イヤ只今見ましたム、手前も讀のを

いかにも、アノ貴殿の奥方はきつい
 貞女でござる。ちよつと遣はさる、
 歌が是じや、つまならぬつまな重れ
 そア、貞女、ア、其元はあやかり
 者登城も遅なかる筈の事、内に斗り
 へばり付てござるによつて御前の方
 はお構ないじやさ當こする雜言過言
 あちらの喧嘩の門違ひ判官さらに
 合點行かすむつとせしが押しづめハ
 一、ハ、コレハ、師直殿には御
 酒機嫌か、御酒参つたの、いつもら
 しやつた、イヤいつ呑ました御酒下
 されても呑いでも勤る所はきつと勤
 る、貴公はなぜ遅かつたの御酒参つ
 たか、イヤ内にへばり付いてござつ
 たか、貴殿より若狹之助殿ア、格別
 勤られます、イヤ又其元の奥方は貞
 女さいひ御器量ぞ申手跡は見事御自

慢なされむつきなされなうそはない
 はさ、今日御前にはお取込み手前逆
 も同前、其中へ鼻毛らしいイヤ是は
 手前も奥も歌でござる。それ程内も
 大切なら御出御無用惣体貴様のやう
 な内に斗り居る者を井戸の鮎だとい
 ふ諭も有、これや後學のため聞て置
 かしやい、彼の鮎めがわづか三尺か
 四尺の井の中を天にも地にもない様
 に思ふて不斷外を見る事がない所に
 彼井戸がへに釣瓶に付てあがりませ
 それを川へ放しやるも何が内に斗り
 居るやつじやによつて、悦んで途を
 失ひ彼方の橋板では鼻柱をびしやり
 又此方の橋板では鼻柱をびしやりに
 びりくくく死にまするサ彼
 の鮎めが鮎が貴様が貴様が鮎が鮎よ
 く貴様も丁ど鮎と同じ事ハ、ハ、ハ、

鮎だんく鮎士だわさ出ほうだい
 判官腹にすへかれこりやこなた狂氣
 めさつたかイヤ氣が違ふたか師直ム
 ヤこいつ武士を捕へて氣違ひさけ出
 頭第一武藏守高野師直ム、すりや先
 方よりの悪言はおみや本性よな、く
 ざいんく又本性なりやごふするチ、
 かうするご抜討ちにまつこうへ切り
 付くる眉間の大疵是げさ怯む身のか
 はし烏帽子の頭二つに切り又切りか
 いるを抜くつくりつ逃廻る折りも
 有れお次に控へし本藏走出て押しこ
 ゃめコレ判官様御短慮さ抱さむる其
 隙に師直は館をさしてこけつ轉びつ
 逃行けば儂れ師直真二つ放せ本藏放
 しやれさせり合内館も俄に騒出し家
 中の諸武士大小名押へて刀もぎ取る
 やら師直を介抱やら上を下へこ、

(床本) 裏門の段

立騒ぐ表御門裏御門兩方打たる館の
 騒動提灯ひらめく大騒ぎ早野勘平う
 るく眼走歸つて裏御門碎けよ破よ
 さ打た、き大聲上壘谷判官の御内早
 野勘平主人の安否心もさなし爰明け
 てたへ早くくご呼はつたり門内よ
 りも聲高に御用有らば表へ廻れ爰は
 裏門成る程裏門合點表御門は家中の
 大勢早馬にて寄付かれず喧嘩の様子
 は何んさく喧嘩の次第相濟んだ出
 つ頭の師直様へ慮外致せし科によつ
 て壘谷判官は閉門仰せ付けられ綱乗
 物にてたつた今歸られしと聞くより
 ハアなむ三寶おやしきへさ走りか
 つてイヤくく閉門ならば館へは
 猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中

裏門の段

竹本相生太夫

野澤歌助
鶴澤友之助

人形

早野勘平 吉田榮三

腰元おかる 吉田文五郎

鷲坂件内 桐竹紋十郎

腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿
様子は残らず聞きました。コリヤ何
んさせぶごせふご取付き歎くを取
て突退エいめるくさへ頼コリヤ
勘平が武士は捨つたばやいもふ是迄
この刀の柄コレ待つてくだされコリヤ
狼狽てか勘平殿チうろたへた是が
狼狽すに居られふか主人一生懸命の
場にも有合はさす剩へ囚人同然の
綱乗物お屋敷は閉門其家來は色にふ
けり御供にはすれし人の中へ兩腰さ
して出られふか爰を放せマ、待
つて下さんせ尤じや道理ぢやがそ
のうろたへ武士には誰がした。皆わ
しが心から死ぬる道ならお前より私
が先へ死なねばならぬ今お前が死ん
だらば誰が侍じやと譽ます。爰
をさつくりと聞譯けて私親里へま

づきて下さんせさ、様もか、様も在
所でこそあれ頼もしい人もふかう成
た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も
聞いて下され勘平殿さわつこ斗りに
泣しづむ、そふじやもつこもそぢは
新參なれば委細の事は得しるまい。
お家の執權大星由良の助殿いまだ本
國より歸られず歸國を待つてお詫び
せんサア一時なり共急がん身拵へ
する所へ鷲坂件内家來引連れかけ出
ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ慮
外を働きかすり疵負せし科によつて
屋敷は閉門追付け首が飛は知れた事
サア腕廻せつれ歸つてなぶり切りか
くがひろげさひしめければよい所へ鷲
坂件内儂れ一羽で喰ひたらねど勘平
が腕の細ねぶか料理梅楳くふて見よ
イヤ物ないはすな家來共長まつたさ

扇ヶ谷の段

切竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

壘谷判官 吉田玉松
顔世御前 吉田文五郎
大星力彌 桐竹紋十郎
原郷右衛門 吉田小兵吉
斧九太夫 桐竹門造
石堂馬之亟 吉田玉七
薬師寺治郎左衛門 吉田玉市
大星由良之助 吉田榮三
諸士 大ぜい

兩方より捕つたまかゝるをまつかせ
さかいくゞり兩手に兩腕捻じ上げつ
しゝと蹴かへせばかはつて切り込
む切つ先を刀の鞘にて丁どうけ追つ
てくるを襦袢柄にてのつけにそらし
四人一所に切りかゝるを右ま左りへ
一時に田樂返しにはたゝゝと打
ちすへられ皆ちりゝゝに行く後へ
件内いらつて切りかゝる立げしそ
つ首握り大地へどうごもんどり打た
せしつかと踏付けサアどうせふとこ
つちの儘突ふか切らふかなぶり殺し
と振上る刀に纏つてコレゝゝそいつ
殺すとお詫の邪覺もふよいわいなさ
留る間に足の下をばこそゝ尻に
尾のない鷲坂は命からゝ逃て行く
エ、残念ゝ去りならむきやつをば
らさば不忠の不忠一先づ夫婦も身を

隠し時節を待つて願ふて見ん最早明
け六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離
れ飛からすかはいゝの女夫づれ道
は急げど後へ引く主人の御身いかゝ
ぞと案じ行こそ浮世なれ……。

(床本) 扇ヶ谷の段

壘谷判官閑居によつて扇ヶ谷の上屋
敷大竹にて門戸を閉家中の外は出入
をさやめ事殿重に見へにけりかゝる
折にも花やかに奥は媚く女中の遊び
御壘所かほよ御前お傍には大星力彌
殿の御氣を慰めんさ鎌倉山の八重九
重色々櫻花籠に生らるゝ花よりも生
る人こそ花紅葉柳の間の廊下を傳ひ
諸士頭原郷右衛門後に續いて斧九太
夫是はゝゝ力彌殿早い御出仕イヤ某
も本國より親共が参る迄晝夜相詰め

罷り有るそれは御奇特千萬郷右衛門
 門兩手をつき今日殿の御機嫌はいか
 いお渡り遊ばさるゝと申し上ぐれば
 かほよ御前チ、二人共太儀く此度
 は判官様お氣詰りに思し召おしつら
 ひでも出よふかご案じたさは格別明
 暮築山の花ざかり御らふじて御機嫌
 のよいお顔げせ夫故に自もお慰に指
 上げふご名有る櫻を取寄せて見やる
 通りの花拵へア、いか様にも仰せの
 通り花は開く物なれば御門も開き閉
 門を御赦さるゝ吉事の御趣向拙者も
 何かなご存ずれどかやうな事の思ひ
 付きは無調法なる郷右衛門ヤア肝心
 の事申し上ん今日御上使のお出こ承
 ばりしが定めて殿の御閉門を御赦さ
 るゝ御上使ならん何んご九太夫殿そ
 ふは思し召されぬかハ、ハ、ハ、コレ

郷右衛門殿此花さいふ物も當分人の
 目を悦ばす斗り風が吹けば散り失る
 こなたの詞もまづ其如く人の心を悦
 ばさふ逆武士に似合はぬらりくら
 りと後からはける正月詞なせごおい
 やれ此度殿の御越度は響應の御役儀
 を蒙りながら執事たる人に手を負せ
 館を騒せし科輕ふて流罪重ふて切腹
 じたい又師直公に敵對は殿の御不覺
 ご聞きもあへず郷右衛門扱は其方殿
 の流罪切腹を願はるゝかイヤ願ひは
 致されど詞をかざらす眞實を申のじ
 やもごをいへば郷右衛門殿こなたの
 格惜しはさからおこつた事金銀を以
 て煩をばり召さるればか様な事は出
 來申さぬご己が心に引當て、怒面打
 けす郷右衛門人に媚諂ふは侍でない
 武士でないナフ力彌殿何んごそふで

は有るまいかご詞の角をなだむる御
 臺二人共に争ひ無用今度夫の御難儀
 なさるゝ元の發りは此かほよ日外鶴
 ク岡で響應の折から道知らずの師直
 主の有る自に無体な戀をいひかけさ
 まんくごくごきしむ恥をあたへ懲さ
 せんご判官様にもしらす歌の點に
 事寄さよ衣の歌を書き恥しめてやつ
 たれば戀の叶はぬ意趣ばらしに判官
 様に悪口元より短氣なお生れ付得堪
 忍なされぬはお道理でないかいのこ
 語り賜へば郷右衛門力彌も俱に御主
 君の御憤りを察し入心外面に現はせ
 り早御上使の御出さ玄關廣間ひしめ
 けば奥へかくと通じさせ御臺所も座
 を下り三人出向ふ間もなく入來る上
 使は石堂右馬の巫師直か昵近藥師寺
 使は治郎左衛門役目なれば罷り通るご會

釋もなく上座に着けば一間の内より
壺谷判官しづくと立出是は御
上使さ有て石堂殿御苦勞千萬先づお
盃の用意せよ御上使の趣承はりい
づれも一ツ献酌積うつを暗し申さ
んチ、それよふござる薬師寺もお聞
致さふ。したか上意を聞かれたか酒
も咽喉へは通るまいさあざ笑へば右
馬之亟我々今日上使に立つたる其趣
具に承知せられよ懐中より御書取
出し押ひらけば判官も席をあらため
承る其文言此度壺谷判官高定私の
宿意をもつて執事高師直を及傷に及
び館を騒せし科によつて國郡を沒收
し切腹申し付ける者なり。聞よりは
つと驚く御臺並居る諸士と顔見合せ
柯れ果たる斗りなり判官動する氣色
もなく御上意の趣き委細承知仕る扱

これからは各の御苦勞休めに打ちく
つろいで御酒一つコレ、判官だま
り召され其方が今度の科はしげり首
にも及ぶべき所お上の慈悲を以て切
腹仰付けらるゝを有りびたふ思ひ早
速用意もすべき筈殊に以て切腹には
定つた法の有る物それに何んぞや當
世様の長羽織せべらん、こしらるゝ
は酒興か但し血迷ふたか上使に立つ
たる石堂殿此薬師寺へ不作法さきめ
つくれればにつここ笑ひ此判官酒興も
せず血迷もせぬ今日上使と聞くより
も斯あらん、期したるゆへ兼ての覺
悟見すべしと大小羽織を脱捨てれば下
には用意の白小袖無紋の上下死装束
皆々是は驚けば薬師寺は言句も出
ず顔ふくらして閉口す。右馬之亟さ
しよつて御心底察し入則ち拙者檢使

の役心しづかに御覺悟ア、御深切忝
なしそも又傷に及びしより斯あらん
と兼ての覺悟アうらむらくば館にて
加古川本藏に抱き留られ師直を討も
らし無念骨髓に通つて忘れがたし湊
川にて楠正成最期の一念によつて
生を引くさいひし如く生れかはり死
かはり鬱憤を晴らさん怒りの聲さ
諸共にお次の襖打ちたいき一家中の
者共殿の御存生に御尊顔を拜したき
願ひ御前へ推參致さんや郷右衛門殿
お取次家中の聲に聞ゆれば郷右衛
門御前に向ひいかゞはからひ候はん
フリ尤なる願ひなれ共由良之助が參
る迄無用、はつと斗り一間に向ひ
聞かると通りの御意なれば一人も叶
わぬ、諸士は返す詞もなく一間も
ひつとそしづまりける。力彌御意を

承り兼て用意の腹切刀御前に直す
 れば心静に肩衣取り退座をくつろげ
 コレ／＼御檢使御見届け下さるべし
 る三方引きよせ九寸五分押戴き力彌
 くハ／＼ハア由良之助は未參上
 仕りませぬフウア存生に對面せず
 残念力彌／＼由良之助はテ残り多や
 な是非に及ばぬ是迄さ刀逆手に取り
 直し弓手に突き立引き廻はす御臺二
 た目さ見もやらず口に稱名目に涙廊
 下の襖踏開きかけ込大星由良之助主
 君の有様見るよりもハ／＼はつと斗り
 にごふさ伏す後に續いて千崎矢間其
 外的一家中ばら／＼さかけ入たり國
 家老大星由良之助只今當着仕りま
 した。ナニ國家老大星由良之助さな
 ア／＼くるしうない近うハア近うハア
 ア近う／＼／＼ハア／＼／＼／＼

ヤレ由良之助待兼たはやいハア御存
 生の御尊顔を拜し身に取て何程かチ
 我も満足／＼定めて仔細開たであ
 る聞たか／＼エ、無念口惜いはやい
 ハアアイヤ委細承知仕る此期に
 及び申し上る詞もなし只御最期の尋
 常を願はしう存じまする。チ、いふ
 にや及ぶと諸手をかけぐつ／＼と引
 廻はし苦しき息をほつとつき由良之
 助此九寸五分は汝へ笹ナ、ハ、我儔
 憤を晴らさせよと切つ先きにてふふ
 匆切り血刀投出しうつぶせにごうと
 轉び息絶れば御臺を始め並居る家中
 眼を閉息を詰め齒をくひしはり控ゆ
 れば由良之助にじり寄り刀取上げ押
 し戴き血に染る切先を打ち守り／＼
 拳を握り無念の涙はら／＼／＼判官

の末期の一句五臟六腑にしみ渡り扱
 こそ末世に大星の忠臣義心の名を上
 げし根ざしは斯くさしられけり薬師
 寺はつゝ立ち上り判官むくたばるか
 らは早／＼屋敷を明け渡せイヤさは
 言れぬ薬師寺いは一國一城の主ヤ
 ナニ旁々葬々の規式取まかなひ心静
 に立退れよ此石堂は檢使の役目切腹
 を見届けたれば此旨を言上せんナニ
 由良之助殿御愁傷察し入る用事有ら
 ば承はらんかならず心おかれなさ
 並居る諸士に目禮し悠々として立歸
 る。此薬師寺も死骸片付ける其間奥
 の間で休息せふ、家來參れと呼出し
 家中共が／＼らくた道具門前へほり出
 せ判官が所持の道具俄浪人にまげら
 れなま館の四方をれめ廻し一間の内

霞ヶ關の段

豊竹綾太夫

鶴澤友若
豊澤猿太郎

人形

大星由良之助 吉田榮三

原郷右衛門 吉田小兵吉

大星力彌 桐竹紋太郎

諸士大ぜい

へ入にける。御臺はわつこ聲を上扱もく武士の身の上程悲しい物の有るべきか今夫の御最期にいたい事は山々なれど未練なご御上使のさげしみが恥かしさに今迄こらへて居たはいのいさをしの有様やご亡骸に抱き付前後もわかす泣賜ふ力彌參れ御臺所諸共亡君の御影を御菩提所光明寺へ早々送り奉れ由良之助も後より追付き葬々の規式取り行ばん堀矢間小寺間其外の一家中道のけいご致されよと詞の下より御乗物手舁にかきすへ戸を開き皆立ち寄つて御死骸涙ご俱に乗せ奉りしづゝさかき上ぐれば御臺所は正体なく歎き賜ふを慰めて諸士のめんく我れ一ご御乗物に引添く御菩提。

(床本) 霞ヶ關の段

御菩提所へ急ぎ行人々御骸見送つて座につけば斧九太夫何に大星殿其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職拙者逆も其右には座せ共今日より浪人ご成り妻子を育衛なし殿の貯へ置き賜ふ御用金を配分し早く屋敷をわたさずば薬師寺殿へ無禮ならんイヤ千崎ご存するにはさす敵の高師直存命なるも我々ご鬱憤討つ手を引受け此館を枕さしてアこれく討死さば悪い了簡親九太夫の申さるゝ通り屋敷を渡し金銀を分けて取るが上分別ご評議の中に由良之助黙然として居たりしが只今の評定に彌五郎の所存ご我胸中一致せりいば亡君の御爲に我々殉死すべき筈、むざ

く腹切らふより足利の討手を受け討死と一決せり、ヤア何んと言はる、能評証かと思へば浪人の瘦顔はり足利殿に弓ひかふア、夫は無分別マア此九太夫合點いかぬチ、親父殿そふじやく此定九郎も其意を得ぬ此談合には、ふいて貰ふ長居は無益お歸りなされそれよかる、いづれもゆるり居めさ、れ親子打連れ立歸るヤア慈頼の斧親子討死を聞きおぢして逃歸つたる憶病者きやつ構はずと大星殿、討手を待つ御用意くア、騒がれな彌五郎足利殿に何根み有て弓引くべき彼等親子が心底をさぐらん爲の斗略、薬師寺に屋敷を渡し思ひく當所を立退き都山科にて再會し胸中残さず打明けて評議をしめんと言ふ間もあらせず次郎

左衛門一間を立出ハテべんく長詮議死骸片付たら早く屋敷を明け渡せよ、いごみか、れば郷右衛門ア、成程お待兼れ亡君所持の御道具其外の武具馬具迄よく改め受け取られよサア由良之助殿退散有れチ心得たりとさしづく立上り御先祖代々我々も代々晝夜詰めたる館の内けふを限りと思ふにぞ名残り惜しげに見返りく御門外へ立出れば御駭送り奉り力彌矢間堀、小寺追々に馳歸り扱は屋敷をお渡し有たか此うへは直義の討手を引受け討死せんこはやり立てば由良之助イヤく今死すべき所にあらず是を見よ旁々亡君の御篋を抜き放し此きつさきには我君の御血をあやし御無念の魂を殘されし九寸五分此刀にて師直も首かき

切つて本意をさげん實尤も諸武士の勇屋敷の内には薬師寺次郎門の貫の木はつしと立てさせ師直公の詞を當り扱よいさまく家來一度に手を叩きごつと笑ふ鯨のこえアレ聞かれよご若侍取返すを由良之助先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか、はつと一度に立出しと思へば無念ご館の内をふりかへりくはつたご睨んで立出る。

(床本) 山崎街道の段

鷹は死しても穂はつまずと醫にもれす入る月や日數も積る山崎の邊りに近き住居早野勘平若氣の誤り世渡るもさでほそ道傳ひ此山中の鹿猿を打つて商ふ種か嶋も用意に持つや袂まで鐵砲雨のしだらでん誰水無月さ

山崎街道の段

(竹本源路太夫)

(鶴澤綱右衛門)

白雨の晴間を爰に松のかげ向ふより
 来る小提灯これもむかしは弓張のこ
 もしび消じぬらさじと合羽の裾に大
 雨を浚いで急ぐ夜の道イヤ申し辛
 爾ながら火を一つ御無心と立寄れば
 旅人もちやくと身がまへしム、此街
 道は不用心とすつて合點の一人旅見
 れば飛道具の一と口商ひふこそはか
 さじ出なをせとびくも動かば一討と
 眼を配ればイヤサ成程盜賊この目
 違ひ御尤千萬我等は此邊りの狩人
 なるが先き程の大雨にほくちもしめ
 り難儀至極サア鐵砲それへお渡し申
 す自身に火を附御借と他事なき詞顔
 付きをきつと眺て和殿は早野勤平な
 らすやささいふ貴殿は千崎彌五郎これ
 は堅固で御無事でと絶て久しき對面
 に主人の御家没落の胸に忘れぬ無念

の思ひ互に拳をにぎり合勤平は指う
 つむき暫し詞もなかりしとエ、面目
 もなき我が身の上古朋輩の貴殿にも
 顔も得上げぬ此仕合せ武士の冥加に
 つきたるが殿判官公の御供先きお家
 の大事起りしは是非に及ばぬ我不運
 其場にも有り合はせず御屋敷へは歸
 られず所詮し時節を待つて御託と思
 ひの外の御切腹なむ三寶皆師直めが
 なす業せめて冥途の御供と刀に手は
 かけたれど何を手柄に御供とッの煩
 さげて言ひ譯せんさ心をくだく折か
 ら密に様子を承はれば由良殿御親
 子郷右衛門殿を始めとして故殿の爵
 憤散ぜん爲寄りくの思召し立ち有
 るこの噂我等連も御勤當の身さいふ
 でもなし手わり求め由良殿に對面
 ぞげ御企の連判に御加へくださら

ば生々世々の面目貴殿に逢もうごん
 げの花を咲かせて侍の一分立て、
 賜はれかし古朋輩のよしみ武士の情
 お頼み申すこ両手を突先非を悔し男
 泣き理せめて不便なる彌五郎も朋
 輩の悔道理と思へども大事むさこ明
 さじミコレサく勤平ばて扱、お手
 前は身の言譯にまじりまぜて御企ての
 イヤ連判などい何の噓ごさ左やう
 な噂かつてなし某は由良殿より郷
 右衛門殿へ急の使ひ先君の御廟所へ
 御石碑を建立せんとの催し併我々迎
 も浪人の身の上これこそ摺谷判官の
 御石塔と末の世迄も人の口の端にか
 ける物故御用金を集る其御使先君の
 御恩を思ふ人を撰り出す爲わざと大
 事を明されず先君の御恩を思はしナ
 合點かく石碑になぞらへ大星

の工みをよそにしらせしはげに朋輩
 のよしみなりハア忝い彌五郎殿成
 程石碑さいひ立て御用金の御拵へ有
 る事さつくに承り及び某も何ぞ
 ぞして用金を調へそれを力に御託さ
 心は千々に砕けども彌五郎殿恥かし
 や主人の御罰で今此ざま誰にかうこ
 の便りもなしされ共かるが親與一兵
 衛と申すはたのしい百姓我々夫婦
 が判官様へ不奉公と悔み歎き何ぞぞ
 して元の武士に立かへれとおぢうは
 さまに歎き悲しむ是幸御邊に逢し
 物語り段々の仔細を語り元の武士に
 立ちかへるさといひ聞かさば纒かの田
 地も我子の爲め何しにいなほるもい
 はじ御用金を手かりに郷右衛門殿
 迄お取次一入頼み存するさ餘儀なき
 詞にム、成程然らばこれより郷右衛

門殿迄右の譯をも咄し由良殿へ願ふ
 て見ん明々日はかならずきつご御返
 事則ち郷右衛門殿の旅宿の所書さ渡
 せば取つて押戴き重々の御世話忝
 し何ぞぞ急に御用金をこしらへ明々
 日お目にかいらん某が有り家お尋
 れあらば此山崎の涉場を左りへ取り
 與一兵衛とお尋ね有らば早速相しれ
 申へし夜更ぬ内に早くも御出コレ此
 行く先きは猶物騒随分ぬかるな合點
 く石碑成就する迄は蚤にも喰さぬ
 此からだ御邊も堅固で御用金の便を
 待つぞさらばくさ両方へ立別れて
 ぞ

(床本) ニツ玉の段

急ぎ行く又もふりくる雨のあし人の
 足音さばくさ道は闇路に迷はれど
 子故の闇につく杖もすぐ成る心堅親

二ツ玉の段

豊竹つばめ太夫

野澤勝市

胡弓 鶴澤友太郎
鶴澤小綱

人形

獵人勘平 吉田榮三

千崎彌五郎 桐竹政龜

斧 定九郎 吉田玉幸

百姓與市兵衛 桐竹門造

仁一筋道の後ろからチーイ親仁殿よい道づれさ呼ばいつて斧九太夫が悴定九郎身の置き所しら浪や此街道の夜働きだんびら物を落しざしきつきにから呼ぶ聲が貴様の耳へはいらぬか此ぶつそな街道をよい年をして大膽く連にならふさ向ふへ廻りきよる付く目玉ぞつこせしが遠は老人是はくお若いに似ぬ御奇特な私もよい年をして一人旅はいやなれどシアいづくの浦でも金程大切なものはない去年の年貢につまり此中から一家中の在所へ無心に居たれば是もびたひらなり才覺ならず埒のあかぬ所に長居はならずごとく一人戻る道と半分言はさすややかましいあり様か年貢の納まらぬ其相談を聞きにはこぬコレ親仁殿おれが言ふ事を

さくさ聞かしやれやアかうじやはこなたの懐ろに金なら四五拾兩のかさ縞の財布に有るのをさつくりさ見付けてきたのじや借して下だされ男が手を合はす定めて貴様も何んぞ詰らぬこそか子が難儀に及ぶによつてさ言ふ様な有る格な事じや有うけれどおれが見込んだらハチしよ事かないと諦めて借て下されく懐へ手を指入引きずり出す縞の財布ア申しそれはくさは是程爰に有る物さひつたくる手にすがり付きイエく此財布は後の在所で草鞋買ふは端錢を出しましたか後に残るは晝食の握り飯くはく亂せんようにさ娘わくれた和中散反魂丹でござりますお赦しなされて下さりませさひつたくり逃げ行く先きへ立ち廻りエ聞き分の

ないむごい料理するがいやさきに手ぬ
 るふいへば付き上がるサア其金爰へ
 まき出せ遅いとたつた一討と二尺八
 寸おがみうちなふ悲しやさいふ間も
 なくから竹はりき切り付くる刀の廻
 りか手の廻りかはづれる抜き身を兩
 手にしつかさ攔み付きごふでもこな
 た殺さしやるのチ、知れた事金の有
 るのを見てするしごさこいさばかす
 さくたばれと肝先へさし付くれればマ
 い、い、まあ待つて下さりませハア
 ぜひに及ばぬ成程く是は金でござ
 りますけれ共此金は私がつた一人
 の娘がござる其娘が命にもかへぬ大
 事の男がござりまする其男のために
 入る金ちと譯有る事ゆへ浪人して居
 まする娘が申しますにはあのお人の
 浪人も元はわしゆへ何ぞぞして元の

武士にしてしんぜたいくご嬢さわ
 しごへ毎夜頼みア一身分にはござ
 りまするごうもしむくの仕様もなく
 ばいさいるく談合して娘にも呑込
 ませ聳へは必ず沙汰なしとしめし合
 はせほんにく親子三人が血の涙の
 流れる金それをお前に取られて娘は
 何んとなりませふコレ拜みます助け
 て下さりませおまへもお侍の果そ
 ふなが武士は相身互ひ此金がなけれ
 娘も聳も人様に顔が出されぬたつた
 一人の娘につれそふ聳ちや者不便に
 ござる可愛ござる了簡してお助け
 なされて下さりませ、エ、お前はお
 若いによつてまだお子もござるまい
 がやんがつてお子を持つて御らうじ
 ませ親仁がい、おつたば尤じやこ
 思し召して此場を助さしやつて下さ
 りませ、マア一里行ば私が在所金を

聳に渡してから殺されましょ申し
 娘が悦ぶ顔見てから死たふござりま
 すこれ申ア、あれくくご呼はれ
 ご後先き遠く山びこの罎に哀れ催せ
 りチ、悲しいこつちやばまつさいこ
 ぼへヤイ老ばれめ其金でおれが出世
 すりや其めぐみでうぬがせがれも出
 世するはやい人に慈悲すりやわるふ
 はむくはぬア、可愛やさぐつこつく
 うんご手足の七轉八倒のたくり廻る
 をすれにて蹴かへしチ、いさしやい
 たかろければおれに恨みはないぞや
 金がありやこそ殺せ金がなけれやな
 んのいの金がつたきじやいとしほや
 南無阿彌陀南無妙法蓮華經ごちらへ
 なりさうせおるさ刀も抜かぬいもさ
 しめぐり草葉も朱に置くつゆや年も
 六十四苦八苦あへなく息は絶にけり
 しすましたりま件の財布くらがり耳

身賣りの段

竹本南部太夫

野澤吉彌

のつかみ讀ヒヤ五拾兩エ、久しぶり
 の御對面、忝しと首にひつかけ死骸
 をすぐ谷底へはれ、こみ蹴込るま
 ぶれば、れは我が身にかゝるさもしら
 ず立つたるうしろよりいつさんにく
 る手負猪、これはならぬと身をよぎる
 かけくる猪は、一文字木の根岩角ふ
 み立て蹴たて鼻いからして泥も草木
 も一まくりに飛行けばあはやと見送
 る定九郎が脊ぼれをかけてごつさり
 さあばらへぬける二ツ玉うん共ぎや
 つ共いふ間もなくふすぼり返りて死
 たるは心地よくこそ見へにけれ猪打
 ちさめしと勘平は鐵砲ひつさげ爰か
 しこさぐり廻りて扱こそと引立れば
 猪にはあらずヤア、くこりや人ぢや
 なむ三實仕損じたりと思へどくらき
 眞の闇誰人なるぞと問れもせずまだ
 息あらんと抱起せば手に當る金財布

つかんで見れば四五拾兩のあたへ
 と押しいたゞきん、猪より先きへ逸
 散に飛むとごさくに急ぎける。

(床本) 身賣りの段

みさき踊りがしゆんだる程に親仁出
 て見やばいんつばいんつれて親仁出
 て見やばいんつ參かつ音の在所歌所
 も名におふ山崎の小百姓與一兵衛が
 壇生の住家今は早野勘平が涙々の身
 の隠れ里女房おかるは寝亂れし髪取
 り上りと櫛箱のあかつきかけて戻ら
 ぬ夫待つ間もさけし投島田結ふにい
 はれぬ身の上を誰にかつげの水櫛に
 髪の色艶すきかへししなよくしやん
 と結立てしは在所におしき姿なり母
 の齡も杖つきの野道さぼく立歸り
 チ、娘髪結やつたか美しうよふ出来

たイヤもふ在所はごこもかも蓼秋時
 分でいそがしい今も藪際で若い衆が
 夢かつ歌に親仁出て見やばくんつれ
 てこ諷ふを聞き親父殿の遅いが氣に
 かかり口迄往たれごようなふ影も
 かたちも見へぬさいなこれやまあご
 ふして遅い事じやわし一走り見て來
 やんしよイヤなふ若い女の一人ある
 くばいらぬ事殊にそなたはちいさい
 時から在所をあるく事さへ嫌ひで搦
 谷様へ御奉公にやつたれごふでも
 草深い所に縁があるやら戻りやつた
 が勘平殿と二人居やればおさましい
 顔も出ぬチーかゝ様のそりや知れた
 事すいた男と添のぢやもの在所はお
 るか貧しいくらしでも苦にならぬや
 んがて盆に成つてささま出て見やか
 んつかゝんつれてさいふ歌の通り

勘平殿とたつた二人踊見にいきやん
 しよ、お前も若い時覺があるささし
 合いくらぬぐはら娘氣もわさくさ
 見へにける。何ぼ其やうに面白おか
 しいやつても心の中はのイエく
 濟でござんすぬしのために祇園町へ
 勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれご
 年寄つてさゝ様の世話やかしやんす
 がそりやいやんな少身物なれご兄も
 搦谷の御家來なれば外の世話するや
 うにもないご親子咄しの中道傳ひ駕
 をかゝせて急ぎぐるは祇園町の一文
 字やエ、こつと一家二家、ム爰じや
 くご門口から與一兵衛殿内にかま
 言ついはいれればはまあく遠い所
 をソレ娘たば盆お茶上ましよご親
 子して植でおいへを伯人々の亭主扱
 タアハ是の親仁殿もいかい太儀、別

條なふ戻られましたかエ、さては親
 父殿と連立つて來はなされませぬか
 是はしたりお前へいてから今におい
 てヤア戻られぬかハテめんよふなハ
 ア、もし稻荷前をぶら付て彼玉殿に
 つまゝりやせぬかのコレ中爰へ見
 に來て極た通りお娘の年も丸五年切
 給銀は金百兩さらりさ手を打つた是
 の親仁むいばるゝには今夜中に渡さ
 ればならぬ金有れば今晚證文を認め
 百兩の金子お借なされて下されご涙
 をこぼしての頼み故證文の上で半金
 渡し残りば奉公人さ引かへの契約何
 が其五拾兩渡すご悦んでいたゞきほ
 たく言ふて戻られたたはもふ四ッで
 も有ふかい夜道を一人金持ていらぬ
 物さ留ても聞かず戻られたか但しは
 道にイエく寄らしやる所はなふか

く様ない共く殊に一時も早ふそなたやわしに金見せて悦ばさふ進いきせき戻らしやる筈じやに合點かいかぬイヤコレ合點のいいかぬはそつちのせんさくこちばさびりの金渡して奉公人連れていのみ懐より金取出し後金の五拾兩これで都合百兩サア渡す請さらしやれエ、お前それで親仁殿の戻られぬ中ばなふかるわがみはやらられぬハテぐすんぐと埒の明かぬコレぐつ共すつ共言れぬ與一兵衛の印形證文が物いふじやて、コレ證文がけふから金で買切つたから一日違へばれこづ、違ふごふで斯せさ濟まいと手を取つて引き立る、マア、待てと取付く母親突退勿退無体に駕へ押込くかき上る門の口鐵砲に簀笠打かけもどりが、つて見

る勘平つかく、こ内に入り駕の内なは女房共こりやマアごへチ、勘平殿よい所へよふ戻つて下さつたご母の悦び其意を得ずごふでも深い譯か有る母者人女房共様子聞かふごお上の眞中ごつかさすれば文字の亭主チ、扱ばこなたが奉公人の御亭主じやの、たごへ夫でも何んでも言號の夫なご、脇より違亂妨げ申す者無之候と親仁の印形有るからはこちには構はぬ早ふ奉公人を受取ふチ、駕殿合點がいくまい兼てこなたに金の入る様子娘の咄して聞た故ごふぞ調へて進んぜたいさいふた斗りで一錢の宛もなしそこで親父殿の言しやるにはひよつここなたの氣に女房賣つて金調やうごよもや思ふては有るまいけれどもし二親の手前を遠慮し

て居やしやるまい物でもないいつそ此與一兵衛が駕殿にしらす娘を賣らふ、まさかの時は切り取りするも侍のならひ女房賣つても恥にはならぬお主の役に立つる金調へておましたらまんざら腹も立まいご昨日から祇園町へ折り極はめにいて今に戻らしやれぬ故親子案じて居る中へ親方殿が見へて夕ア親父殿に半ん金渡し後金の五拾兩ご引かへに娘を連れて遊ふご言てなれご親父殿にあふての上ご譯をいふても聞き入れず今連れていなしやる所ごふせふぞ勘平殿是は、先づ以つて舅殿の心遣ひ、忝いしたごこちにもちつごよい事が有れ共それは追つて親仁殿も戻られぬに女房共は渡されまい、ごはなげに、ハテはいは親なり判が、り尤

も夕ア半ん金の五拾兩渡されたでも有ふけれどイヤこれ京大阪を股にかけ女贖の嶋ほど奉公人を抱へる一文字屋渡さぬ金を渡したとこいふて濟物かいのまだ其うへに慥な事があるてや、これの親仁が彼五拾兩と言ふ金を手ぬぐひにくるくまいて懐にいれらるゝ、それやあぶない是に入れて首にかけさつしやれとおれがきて居る此一重物の縞のきれでこしらへた金財布借たればやんがて首にかけて戻られうヤア何んこなたが着てゐる此縞のきれの金財布がチ、てや。あの此縞じや何と慥な證據で有ふが。ご聞くよりはつと勘平が肝先にひしこたへそばあたりに目をくばり袂の財布見合はせば寸分違はぬ糸入縞、なむ三寶扱は夕ア鐵砲で

打ち殺したは鼻で有つたかハアはつと我胸板を二ツ玉で打ちぬかるゝよりせつなき思ひまはしらすして女房コレこちの人そはくせすさやる物かやらぬ物が分別して下さんせチ、成程ハテもふあの様に慥に言はるゝからはいきやらずば成まいかアノまつ様に逢ひでもかへ、イヤ親父殿にもけさちよつとあふたが戻りは知れまいコウそんなりやまつさんに逢ふてかへ夫れならそふさいひもせでかゝ様にもわしにも案じさして斗りと言ふに文字も圖に乗つて七度尋ねて人うたがへじや親仁の有り所のしれたのでそつちもこつちも心むよいまだ此上にも四の五の有ればいや共んでんご沙汰まあくさりりさ濟んでめでたいお袋も御亭主も六條参りし

てちと寄りしやれサアく駕に早うのりやアイくコレ勘平殿もふ今あつちへ行ぞへ。年寄つた二人の親達ごふでこな様のみんな世話取わけてまつ様はきつい持病、氣を付けて下さんせと親の死目を露しらす願ふ便さいぢらしさ、いつそ打ち明け有りのまゝ、咄さんにも他人有りさ心を痛めこたへ居るチ、賀殿夫婦の別れ暇乞がしたかるけれごそなたに未練な氣も出よかと思ふての事て有るイエく何んば別れても主のために身を賣れば悲しうも何共ないわしやいさんで行くか、様したむご、様に逢ずに行くのがチ、それも戻らしやつたらつい逢にいかしやるぞいの煩はぬ様に灸すへて息才な顔見せにきてたも鼻紙扇もなけれや不自由な何んに

勘平切腹の段

切 豊竹古鞆太夫

鶴 澤清六

人形

百姓與市兵衛女房	吉田玉七
娘おかる	吉田文五郎
一文字屋才兵衛	吉田文作
早野勘平	吉田榮三
めつぼう彌八	吉田兵次
種ヶ島の六	吉田傳之助
狸の角兵衛	吉田瓢壽呂
原郷右衛門	吉田小兵吉
千崎彌五郎	桐竹政龜

もよいか、こぼ付いてけが仕やんな
 こ駕に乗まで心を付けさらばやさら
 ば何の因果で人並な娘を持ち此悲し
 いめを見る事じやこ商をくひしげり
 泣きければ娘は駕にしがみ付き泣を
 しらさじ聞かさじと聲をも立てずむ
 せかへる。なさけなくも駕かきあげ
 道をはやめて急ぎ行く。

(床本) 勘平切腹の段

母は後を見送りくア、よしない事
 いふて娘も嘸悲しかるチ、こな人わ
 いの親の身でさへ思ひ切りがよいに
 女房の事ぐく思ふて煩ふて下さ
 んな此親父殿はまた戻らしやれぬ事
 かいのふこなたあふたと言はしやつ
 たのア、成程そりやまあごころであ
 はしやつて何所へ別れていかしやつ

た、されば別れた其所は鳥羽が伏見
 か淀竹田さ口から出次第めつぼう彌
 八種ヶ島の六、狸の角兵衛所の狩人
 三人連れ親父の死骸に藁打ちきせて
 戸板にのせごやぐこ内に入り、夜
 山仕舞て戻りがけ是の親父が殺され
 て居られた故狩人仲間が連れて来た
 と聞よりはつと驚く母、何者の仕業
 コレ舞殿殺したやつは何者じや敵を
 取てくだされのふコレ親父殿くこ
 よべごさけべご其かひも泣より外の
 事ぞなき狩人共口々にお袋悲しかる
 代官所へ願ふて詮議してもらはしや
 れ笑止くこ打つて皆は我家へ立
 歸る。母は涙の隙よりも勘平が傍へ
 差よつて、コレ舞殿よもやくくく
 くこは思へ共合點がいかね何んぼ
 以前が武士じやきて舅の死目見やし

やつたら悔りも仕やるはづ、こなた
 道であふた時金受取はさつしやれぬ
 か、親父殿もなんと言れた、サアい
 はつしやれサア何さごふも返事は有
 るまいものない證據はコレ愛にさ勘
 平が懐へ手を指入れて引出すはさ
 つきにちらりさ見て置た此財布コレ
 血の付いて有るからはこなたが親父
 を殺したのイヤそれはくさばエ、
 わごりよばなに隠しても隠くされぬ
 天道様が明らかかな。親父殿を殺して
 取た其金にや誰にやる金ぢやム、聞
 へた。身贖な勇むすめ賣つた其金を
 中で半分くすれて置いて皆やるまいか
 さ思ふてコリヤ殺して取つたのじぢ
 やな、今さいふ今迄も律儀な人じや
 さ思ふてだまされたが腹が立はいや
 いエ、愛な人でなし、あんまりあき

れて涙さへ出ぬわいやいなふいさし
 や與一兵衛殿畜生のやうな聲さは知
 らすごぶぞ元の侍に仕てやりたい
 さ年寄て夜も寝ずに京三界をかけあ
 るき彌財を投打つて世話さしやつた
 も返つてこなたの身のあださ成つた
 るか飼かふ犬に手を喰るゝさよふも
 く此やうにむごたらしう殺された
 事ぢや迄コリヤ愛な鬼よ此よささま
 をかへせ親父殿を生けて戻せやいと
 遠慮會釋もあら男のたぶさをつかん
 で引寄くたゝき付づだくゝに切り
 さいなんだ逆是で何の腹が居よさ恨
 の數々くごき立てかつげさふして泣
 ゐたる身の誤りに勘平も五體に熱湯
 の汗を流し疊にくひ付き天罰さ思ひ
 知つたる折こそあれ、深編笠の侍
 二人早野勘平在宿をしめさるゝか、

原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしこ
 音なへば折悪けれ共勘平は腰ふさぎ
 脇挟で出迎ひコレハ御兩所共に
 見ぐるしき壇生へ御出忝しご頭を
 さぐれば郷右衛門見れば家内に取込
 みも有りそふなイヤもふ些細な内證
 事、おかまいなく共いざ先あれへ、
 然らば左様に致さんさすつこ通り座
 に付けば二人も前に兩手をつき此度
 殿の御大事にはづれたるは拙者が重
 々の誤り申しひらかん詞もなし、何卒
 某が科御ゆるしを蒙り亡君の御年
 忌諸家中諸共相勤る様に御兩所の御
 執成偏に頼み奉るご身をへりぐだ
 り述ければ郷右衛門取りあへず先以
 て其方貯へなき涙人の身さして多く
 の金子御石稗料に調進せられし段由
 良之助殿甚だ感じ入れしが石碑を營

むは亡君の御菩提殿に不忠不義をせし其方の金子を以て御石碑用に用ひられんは御尊靈の御心にも叶ふまじと有つてなそれ金子は封のまゝ相戻さるゝと詞の中より彌五郎懐中より金子取出し勘平も前にさし置けばはつさばかりに氣も轉動母は涙さもろ共にコリヤ爰な悪人づら今こいふ今親の罰思ひ知たか、皆様も聞て下され親父殿が年寄て後生の事は思はず、親の爲に娘を賣金調へて戻らしやるを待ちぶせして、あのやうに殺して取た金じや物天道様がなくばしらす何で御用に立つ物ぞ親殺しのいき盗人に罰を當て下されぬは神や佛も聞へぬあの不孝者お前方の手にかけてなぶり殺しにして下されわしや腹が立つわいのと身をなげふして泣き居

たる聞くに驚き兩人刀追取つて弓手馬手につめかけ、彌五郎聲をあららげヤイ勘平非義非道の金取つて身の科の訛せよといはぬぞよ、わがやうな人非人武士の道は耳に入るまい親同然の舅を殺し金を盗だ重罪人は大身籠の田樂さし拙者が手料理ふるまばんさばつたさならめば郷右衛門かつしても盜泉の水を飲すまは義者のいましめ舅を殺し取たる金亡君の御用金になるべきか生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察有つてつきもごされたる由良の助殿の眼力ほ、天晴れくさりながらハア情けなきは此事世上に流布有つて壺谷判官の家來早野勘平非義非道を行ひしさいは、コリや汝斗りが恥ならず亡君の御恥辱さしらざるかこなく

く、うつけ者めなうぬ勘平これさ勘平おみやごうした者だ左程の事の辨なきなんじにてはなかりしむいかなる天寃が見入しとするとき眼に涙を浮め事を分け利をせむればたまり兼ねて勘平諸肌押脱脇指を抜くより早く腹へぐつこつきたてア、いづれもの手前面目もなき仕合せ拙者も望み叶はぬ時は切腹と兼ての覺悟我舅を殺せし事亡君の御恥辱と有れば一通り申ひらかん兩人共に聞いてたべ、夜前彌五郎殿の御目にか、り別れて歸るくらまぎれ山越猪に出合二ツ玉にて打ち留かけよつてさぐり見れば猪にはあらで旅人なむ三寶誤つたり薬はなきか懐中をさかし見れば財布に入つたる此金道ならぬ事なれ共天より我に與ふる金と直に

祇園一力茶屋の段

仲	お	仲	彌	喜	重	力	由
居	か	居	五	多	太	彌	良
竹本龜久太夫	る	豊竹千駒太夫	郎	八	郎	竹本さの太夫	之助
	竹本鍬太夫		竹本文太夫	豊竹富太夫	竹本長尾太夫		

馳行彌五郎殿に彼金をわたし立歸つて様子^{ようす}を聞^きげ打留^{うちどめ}たるは我舅金^{わがぢゆうきん}は女房^{にようぼう}を賣^うつた金^{かね}、かほご迄^{まで}する事^{こと}なす事^{こと}いすかのほし程^{ほど}違^{ちが}ふと言^いふも武運^{ぶげん}に盡^つたる勘平^{かんぺい}が身^みの成^なり行^ゆき推量^{すいりやう}有^あれと血^ちばしる眼^{まなこ}に無念^{むねん}の涙^{なみだ}仔細^{さいしゆ}を聞^きくより彌五郎^{やご}ずんざ立^{たち}上^{あが}り死骸^{しかい}引^ひ上^あ打返^{うちかへ}しムウく疵口^{きずぐち}吹^ふめ郷右衛門^{ごうゑもん}是^{こゝ}見^みられよ鐵砲^{てつぱう}疵^{きず}には似^にたれ共^{ども}これ^{これ}は刀^{かたな}でえぐつた疵^{きず}、エ、勘平^{かんぺい}早^{はや}まりしと言^いふに手負^{てあひ}も見^みて恫^{びつ}り母^{はは}も驚^{おど}く斗^{たたか}りなり、郷右衛門^{ごうゑもん}心付^{こゝろを}イヤコレ千崎殿^{ちさきどの}ア、是^{こゝ}にて思^{おも}ひ當^{あた}つたり、御自^{ごじ}分^{ぶん}も見^みられし通^{とほ}り是^{こゝ}へ來^きる道端^{みちばた}に鐵砲^{てつぱう}請^{まを}けたる旅人^{たびびと}の死骸^{しかい}立^{たち}寄^より見^みれば斧定^{おのまたく}九郎^{くわう}強^{つよ}慾^{よく}な親^{おや}九太夫^{たふ}さへ見^み限^{かぎ}

つて勘當^{かんどう}したる惡黨^{あくどう}者^{もの}、身^みのたゞな^{たゞな}き故^{ゆゑ}に山賊^{さんぞく}する事^{こと}聞^きいたるが疑^{うたが}ひもなく勘平^{かんぺい}が舅^{ぢゆう}を討^うたはきやつか業^{わざ}エいそんなりやあの親父^{おやぢ}殿^{どの}を殺^{ころ}したは外^{ほか}の者^{もの}でござりますかへハアはつこ母^{はは}は手負^{てあひ}に緋^ひり寄^よりコレ手^てを合^あして拜^{まが}みます、年^{とし}し寄^よりの愚痴^{ぐち}な心^{こゝろ}から恨^{うらみ}みいふたは皆^{みな}誤^{あや}りこらへ下^{くだ}され勘平^{かんぺい}殿^{どの}必^{かなら}ず死^しんで下^{くだ}さるなと泣^{なみだ}訖^なれば顔^{かほ}ふり上^あり只^{ただ}今^{いま}母^{はは}の疑^{うたが}ひも我^{わが}惡^{あく}名^なも晴^はれたれば是^{こゝ}をめぐの思^{おも}ひ出^でさし後^{あと}より追^お付^つ舅^{ぢゆう}殿^{どの}死^し手^て三途^{さんず}を伴^{とも}はんぞ突^つ込^こ刀^{かたな}引^ひ廻^{まわ}せばア、暫^{しばらく}く思^{おも}はずも其^{その}方^{ほう}が舅^{ぢゆう}の敵^{かたき}討^うつたるはいまだ武運^{ぶげん}に盡^つざる所^{ところ}弓矢^{ゆみや}神^{かみ}の御^{ごん}惠^{めぐみ}にて一功^{ひとこう}立^たつ

仲 居 竹本播路太夫

亭 主 豊竹辰太夫

九 太 夫 竹本貴鳳太夫

伴 内 竹本鏡太夫

平 右 衛 門 竹本大隅太夫

三味線 (豊澤新左衛門 鶴澤道八 野澤吉兵衛)

人形

斧 九太夫 吉田 玉幸

たる勘平息の有る中郷右衛門も密に見する物有り懐中より一卷を取り出しさら／＼と押しひらき此度亡君の敵野高師直を討取らんを神文を取かはし一味徒黨の連判かくのごとしも讀も終らず苦痛の勘平其姓名は誰々成るぞやチ、徒黨の人数は四十五人汝が心底見届けたれば其方を指加へ一味の義士四十六人は是をめぐりの土産にせよ懐中の矢立取出し姓名を書記し勘平これさ血判心得たりと腹十文字にかき切り臟腑をつかんでしつかさ押へしサア血判仕つたアのるなく早野勘平重氏血判たしかに相濟んだぞエ、忝や有難や我望み

達したり母人敷いて下さるな舅の最期も女房の奉公も反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金さいふに母も涙ながら財布と俱に二包二人の前に指出し勘平殿の魂の入つた此財布を殿じやと思ふて敵討の御供につれてござつて下さりませ、チ、成程尤なりと郷右衛門金取り納め、思へば此金は縞の財布の紫摩黄金佛果を得よさいひければア、佛果さげがらばし死ぬ／＼魂魄此士さやまつて敵討ちの御供するさいふ聲も早や四苦八苦母は涙にかきくれなむらナフ勘平殿此事を娘にしらしせて死目にあはしてやりたいイヤ／＼

鷺坂伴内 桐竹紋十郎

一力亭主 吉田文作

千崎彌五郎 桐竹政龜

竹森喜多八 吉田光之助

矢間重太郎 吉田扇太郎

大星由良之助 吉田榮三

寺岡平右衛門 吉田玉松

大星力彌 桐竹紋太郎

傾城おかる 吉田文五郎

親の最期は格別勸平が死だ事必ず知らして下さるなお主の爲に賣つたる女房此事聞て不奉公せば主に不忠するも同然只其まゝにさし置かれよサア思ひ置く事なしと刀の切つ先き咽喉にぐつささしつらぬきかつげさふして息絶たりヤアもふ舞殿は死しやつたか扱もく世の中におれがやうな因果な者がまた一人有らふか親父殿は死なしやる頼みに思ふ舞を先き立ていとし可愛の娘には生き別れ年寄た此母が一人残りは是がママなんご生きて居られふぞコレ親父殿與一兵衛殿おれも一ツ所につれて往てくだされさ。取付ては泣さげびまた

立ちあがつてコレ舞殿母も俱にさすかり付てはふししづみあちらでは泣きこちらでは泣わつさばかりにどうぞ伏聲をばかりに歎しは目もあてられぬ次第なり。郷右衛門つゝ立ちあがりアこれく老母なげかるゝはこそはりなれども勸平が最期の様子大星殿にくはしく語り入用金手渡しせば満足あらん首にかけたる此金は舞之舅の七々日四十九日や五十兩あはせて百兩百ヶ日の追善供養後れんごろにさむらばれよ、さらばさらばおさらばさ見送るなみだ見かへるなみだなみだの涙の立歸る人もはかなき。

(床本) 祇園一力茶屋の段

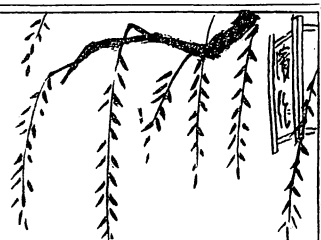
花に遊ばし祇園邊りの色揃へ東方南方北方
西方みだの淨土が塗りにぬり立てびつかり
びか／＼光りか／＼やくはくや藝子にいかな
粹めも現ぬかしてぐざんごろつくごろつく
やワイワイワイトサ九誰を頼まふ亭主は居
ぬか亭主／＼是ばいそがしいばごいつ様
じやごなた様じやヨウ斧九太夫様御案内ご
ばけうさい／＼九イヤ初めてのお方を同道
申たきつふ取込をふに見へるが一つ上げま
す座敷が有るか／＼ヤござります共／＼今晚
は彼由良大盡の御趣向で名有る色達を揃み
込み下座敷はふさがつてござりますれごち
ら亭座敷が明いてござります九そりや又
蜘蛛の巢だらけで有ふ／＼又悪口を九イヤサ
よい年をして女郎の蜘蛛の巢にかゝるまい
用心／＼コリヤきついは下には置かれぬ二階

座敷ソレ灯を燈せ仲居共九何んご件内殿由
良之助が体御らうじたか件九太夫殿ありや
いつそ氣違でござる段々貴公より御内通有
つてもあれ程に有るふさは主人師直も存ぜ
ず拙者に罷登つて見ごぞげ心得ぬ事有らば
早速知せよご申付ましたか扱／＼我もへん
しも折れましてござる併し粹力彌めは何ん
ぞ致したな九こいつも折節此處へ参り俱に
放埒指合いくらぬがふしぎの一つ今晚は底
の底を捜し見んご心巧みを致して参つた密
々にお咄し申さふイヤ二階へ件先づ／＼九
然らば斯お出歌じつは心に思ひはせいであ
だなほれた／＼の口先はいかいつやでは有
るはいな／＼彌五郎殿喜多八殿是か由良之助
殿の遊び茶屋一力ご申のでござる誰そち
よご頼みたい仲アイ／＼ごなた様じやへ重
アイヤ我々は由良之助殿に用事有つて参つ
た奥へ往て言ふには矢間重太郎千崎彌五郎

しすりに席即・店北・
理料御席即・店南・
番二六四二町新話電

作瀆

町



竹森喜多八でござる此間より節に迎ひの人

を遣はしますれごお歸りのない故三人連で

参りましたちご御相談申されば成らぬ儀が

ござる程にお逢なされて下されご吃度申で

おくりやれ 仲夫は何ん共氣の毒でござんす

由良様は三日以來吞みつつけお逢なされて

からたわいは有るまい本性はないぞへ 重ハ

テ扱てまあそふいふておくりやれ 仲 アイ

彌五郎ぞのお聞きなされたか 彌 承

ばつて驚き入りました初めの程は敵へ聞か

する計畧ぞ存じましたがいにかふ遊びに實が

入り過ぎまして合點が参らぬ 何んぞ此喜

多八が申した通り 魂を入れ替つてござらふ

かのいつそ一間へ踏込 重 イヤ〜得さ面談

致した上 成程然らば是に 三人 相待ちませ

ふ 仲 手の鳴る方へ〜 由 さらまよ〜 仲

由ら鬼やまたい〜 由 さらまへて 酒吞そ

〜アコリヤさらまへたばサア 酒ヶ 鏡子持

て〜 重 イヤコレ由良之助殿矢間重太郎で

ござる。コリヤ何ぞなさるゝ由 なるむ三仕舞

た 仲 ナ〜氣の毒何んぞ榮様ふしくたやうな

お 侍様方お連様かいな 仲 さあればお三人

さもこはい顔して 重 イヤコレ女ら達我々は

大星殿に用事有つて参つた、暫く座を立て

もらひたい 仲 そんな事で有りそな物由良様

奥へ行くぞへお前も早ふお出皆様是に〜 重

由良之助殿矢間重太郎でござる 竹森喜多

八でござる 彌 千崎彌五郎御意得に参つたお

目さまされませぬ 由 是は打揃ふてよお出

なされた何んぞ思ふて 重 鎌倉へ打立つ時候

はいつ頃でござるな 由 さればこそ大事の事

をお尋ね成丹波典作が歌に江戸三界へ往か

んしてハ〜、御免候へたはい〜 三人

ヤア酒の酔本性違はず性根が付かずば三人

が酒の酔を醒さしませふかな 平ヤレ聊爾な

されまするな 憚りながら平右衛門めが一言

晩秋

南一温泉料理



獨特の温泉快爽な気分に分
善美な湯宿に一度を盡す

お電話の話用は

南
5番・701番・711番
(長) 132番・5291番
西630番

のみさなみ

南一温泉料理

四ツ橋

申し上たい儀がござります暫くくくく
 くくくお控へ下さりませふ由良の助様寺
 岡平右衛門めでござります御機嫌の体を拜
 しましていか斗り大悦に存じ奉ります由
 寺岡平右さばエ、何んでえすか前かご
 北國へお飛脚にいかれた足の軽い足輕殿か
 平エ、左様でござります殿様の御切腹
 を北國にて承ばりましてなむ三寶さ宙を
 飛んで歸ります道にてお家も召上られ一
 家中も散々ござり承ばつた時の無念さ奉公
 こそ足輕なれ御恩はかはらぬお主のあだ、
 おのれ師直めを一討さ鎌倉へ立ち越三ヶ月
 が間非人ご成つて付きれらひましたれ共敵
 は用心殿しく近か寄る事も叶ひませす所詮
 どん腹かつさばかんぞ存じましたも國元の
 親の事を思ひ出しましてすごらく歸りま
 した所に天道様のお知らせにや何れも様方
 の一味連判由チホンくくく平サ一味

連判の様子承ばりまするミヤレ嬉しや有
 難やと取る物も取りあへずあなた方の旅宿を
 尋ねひたすらお頼み申上ましたればチ、出
 かしたうい奴じやお頭へ願つてやるこのお
 詞に縋りこれ迄推参仕りましたも師直屋
 敷の由ア、こいよくくコレ平ネイ由コ
 レ平ネイ由コレくく平ネイ由其元は足
 輕でなうて大きな口輕じやの何んごたいこ
 持なされぬか尤もみたくしも蚤の頭を斧で
 割つた程無念な共存じて四五十人一味こし
 らへて見たがア、あぢな事よふ思つて見
 れば仕損じたら此方の首がころり仕負せた
 ら後で切腹。すりやごちらでも死ねばなら
 ぬと言ふば人參吞で首くゝる様な物殊に其
 元は五兩に三人扶持の足輕ア、コレくくお
 腹は立られなくはつち坊主の報謝米程取
 て居て命を捨て、敵討せふさばそりや青海
 苦貰ふた禮に太々神樂を打つやうな物我等

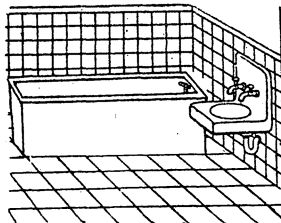
化粧タイル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置
 特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
 新一橋

岡部商會

電話新町一六六九
 二二七六

阪急夙川

岡部商會支店

電話西宮一九七六

知行千五百石貴様さくらべるご敵の首を斗
 升で斗る程取つても釣合ぬ所でやめた
 ナ聞こへたか兎角浮世はコレコレかふ
 した物じやツンツンツンツンツンツンテ
 チチチンテンツンツンツンシヤンなぞごひき
 かけた所はたまらぬ平是は由良之助様
 のお詞共覺へませぬ僅三人扶持取る拙者め
 でも千五百石の御自分様でも撃ぎました命
 は一つ御恩に高下はござりませぬごサ押す
 に押されぬお家の筋目殿様の御名代もなさ
 れますお歴々様方の其中へモ見る影もない
 私めも指加へてごお願ひ申は憚り共慮外共
 ほんの猿も人真似お草履をつかんで成り共
 お荷物をおつかいで成り共参りませぶごうぞ
 おさにも召し連れられてナ申コレ申
 へははしたり寝てござるそふなコレサ
 平右衛門あつたら口に風をひかすまい由良
 之助は死人も同然矢間殿千崎殿モウ本心は

見へましたか申合せた通りはからひませ
 ぬか御い様一味連判の者共への見せしめ
 イザ何れもご立寄るを平ヤレ暫くご平右衛
 門押なだめん傍に寄つく思ひ廻はします
 れば御主君にお別れなされてより仇を報は
 んご様々の艱難木にも萱にも心を置く人の
 譏無念をばじつごこたへてござるからは御
 酒でも無理にまいらすは是迄命も續きます
 まい醒ての上の御分別ご無理に押さへて三
 人を伴ふ一間は善悪の明りをてらす障子の
 内影を隠すやカ月の入り山科よりは一里半
 息を切つたるちやくし力彌内を透して正体
 なき父が寢姿起すも人の耳近しご枕元に立
 寄つて響にかける刀の鏗音鯉口ちやんご打
 ちならせば由むつご起てヤア力彌か鯉
 口の音ひかせしは急用あつてか密に
 カ只今御臺かほよ様より急のお飛脚密事の
 御状由外に御口上はなかつたかカ敵由ア

現
代
的



電話 戒三七五六番

コレ敵を見へしは群いるかもめ、さきの聲
 と知れりり大きな聲ぢやのウハ、敵高師直
 歸國の願ひ叶ひ近々本國へ罷り歸る委細の
 儀はお文さの御口上よし、其方は宿へ
 歸り夜の内に迎への駕往けく、カはつさた
 めらふ隙もなく山科さして引かへす、由先づ
 様子氣遣ひミ狀の封じを切る所へ九 大星殿
 由良殿九太夫でござる御意得ませう、こ
 聲かけられ、是は久しや、一年も逢はぬ
 内よつたぞや、額に其しは延しにお出か
 アノ爰な薙破りめ、九イヤ由良殿大功は細
 をかへり見すと申すか、人の譏も標はず遊里
 の遊び大功を立つる基、速れの大丈夫未頼
 もしう存る由、ホ、チはばかたいは、石火
 矢さ出かけた去りてはおかれい、九イヤサ
 由良之助殿さばけまい、誠貴殿の放埒は、敵
 を討衛さと見へるか、おんでもない事由、ヤ忝
 ない四十に餘つて色狂ひ馬鹿者よ氣遣ひよ

と笑はれふかと思ふたに敵を討つ衛は、九
 太夫殿嬉しいそへ、スリヤ其元は主人
 壺谷殿のあだを報する所存はないか、由けも
 ないこと、家國を渡す折から城を枕に討
 死さいふたのはアリヤ御臺様への追従時に
 貴様が上へ對して朝敵同然さ其場をついに
 立つた我等は後にトしやちばつてゐたいか
 いたわけの所で仕廻いは付かす御墓へ參つ
 て切腹さ裏門からこそ、今此安樂な
 樂しみするも貴殿のおかげ昔のよしみは忘
 れぬ、堅みやめて碎けおれ、九い
 様此九太夫も昔思へば信太の狐、げけ現は
 して一献汲ふか畜生め、九ム、由ハ、九ム、
 由ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、
 振だお盃、又頂戴さ會所めくのか、さし
 おれ吞は、吞おれさすは、九てうご請おれ着
 をするは、さ傍に有合ふ蝟さかなばさんです
 つささし出せば、手を出して足を戴く蝟着

新興大皇帝ネキの封切場

おなじみの 辨天座

忝ないご戴いで喰入とする九手をじつこ
 さらへコレ由頁之助殿明日は主君壘谷判官
 殿の御命日取りわけ速夜が大切と申が見事
 其着貴殿は喰か出たべる共く但し主君壘
 谷殿が蟄になられたと言ふ便宜があるかエ
 ぐちな人では有るこなたやおれが浪人仕た
 は判官殿が無分別からおこつた事スリヤ恨
 こそあれ精進する氣微盡もござらぬお志さ
 しの看賞翫いたすご何氣もなく只一口に味
 はふ風情九邪智深き九大夫もあきれて詞も
 なかりける由扱此看では呑めぬく鶏
 させ鍋焼させん其元も奥へお出女郎共諷へ
 く九元もしごろもごろの浮拍子テレッツ
 クくッテンく二人儕れ末社共めれん
 になさで置べきかご騒ぎに由ま九ぎ二人れ
 入にける件始終見届け鷺坂内二階よりお
 り立九大夫殿仔細とつく見届け申た、主
 の命日に精進さへせぬ根性で敵討存じも寄

らす此通り主人師直公へ申し聞け用心の門
 をひらかせませふ九成程最早御用心に及ば
 ぬ事件コレサまだ爰に刀を忘れて置きまし
 た九ほんに誠に大馬鹿者の證據嗜の魂
 見ませふかな件見ませふく扱鎗たりな赤
 鬨二人ハハハハハ九彌々本心理はれ御安
 堵くソレ九大夫が家來迎ひの駕はつこ
 答へて持出る九件内殿お召なされ先づ御
 自分ば御老体平にく九然らば御免と乗う
 つる件イヤナニ九大夫殿承れば此所に
 勘平が女房が勤め奉仕ておるご聞きまし
 たが貴殿には御存じないかな九大夫殿く
 と言へご答へすコハふしぎご駕の簾を引明
 れば内には手ごろの庭の飛石コリヤごふじ
 や九大夫は松浦さよ姫をやられたご見廻す
 こなたの椽の下より九コレく件内殿く
 九大夫が駕ぬけの計略は最前力彌が持參せ
 し書翰が心元なし様子見届け後より知らさ

映畫の秋の

松竹座

・道頓堀・

斷然斯界に君臨する
その豪華さよ。

今宵を語る 映畫

明日を話す レヴユウ

秋にして春を想はす

蕩麗なる

松竹座氣分ぜひ

んやはり我等が歸るていにて貴殿は其駕に引添て合點く黙き合ひ駕には人の有る体に見せてしづく立歸る折に二階へ暫も妻のお輕はゐいさまし早里馴れて吹風にうさを暗して居る所へ由ちよこいてくるぞや由良之助さも有る侍も大事の刀を忘れて置たつい取つてくる其間に掛けものもかけ直し燻の炭もついで置きやアソレくくこちらの三味線ふみおるまいぞ是はしたり九太はもふ逝れたそふな父よ母よ泣聲聞けば妻にあふむのうつせし言の葉エ、何んじやいな置しやんせ由傍り見廻はし由良之助釣燈籠の明りを照し讀長文は御臺より敵の様子こまなく女の文の後や先きり々ではかざらず餘所の戀よと羨ましくおかるは上より見おるせご夜目遠目成り字性もおぼる思ひついたるのべ鏡出して寫して讀取る文章九下家よりは九大夫かく

りおるす文月かげにすかし讀こは輕神ならすほごげかゝりしお輕がかんざしばつたり落れば由下たにはいつも見あけて後へ隠す文九椽の下には猶あつば輕上には鏡の影隠し由良様か由おかるかそもじはそこに何してぞ私しやお前にもりづぶされ餘りつらさに醉さまし風に吹かれて居るはいナ由ムンハテナフリヤよふ風に吹れてじやのイヤかるそもじにちさ咄したい事がある屋根越の天の川でこゝからは言はぬちよつこおりてたもらぬか咄したいこは頼みたい事かへ由マアそんな物廻つてきやんしよ由イヤく段梯子へおりたらば仲居が見付けて酒にせふアいごふせふなム、幸ひ爰に九ツ梯子是をふまへておりてたもこ小屋根に掛ければ此梯子は勝手がちがふてチこはごふやら是はあぶない物由大事ないくあぶないこはいは昔の事三間づゝまたげて

どうさんぼり

浪花座

行興月一十の

計盛新業新

愉快な

お笑ひ

痛烈な

お笑ひ

素晴しい

お笑ひ

も赤かうやくもいらぬ年ばへ輕あほう言は
 んすな船に乗つた様でこはいはいな由道理
 船玉様が見へるは輕チ、覗かんすないナ
 由 洞庭の秋の月様を拜み奉るじや輕イヤ
 モウそんならおりやせぬぞへ由 おりざおろ
 してやる阿レ又悪い事を由 やかましい
 生娘か何その様に逆縁ながら後より
 じつさだきしめ抱おろし何さそもじは御ら
 うじたか輕アイいへ由 見たで有く輕何
 じややら面白そうな文由 アノ上から皆よん
 だか輕チくご由 ア、身の上の大事さこそ
 は成りにけり何んの事じやぞいな由 何の
 事さはおかる古いがほれた女房になつてた
 もらぬか輕おかんせ嘘ぢや由 サア嘘から出
 た誠でなければ根がさげぬおふさいやく
 輕イヤいふまい由 ソリヤなぞ輕サアお前の
 は嘘から出て誠ぢやない誠から出た皆うそ
 由 おかる輕アイ由 け出そふ輕エイ由 嘘で

ない證據に今宵の内に身請せふ輕ムンイヤ
 わしには由 間夫があるならそばしてやる輕
 そりやマアほんさかへ由 侍冥利三日成り
 共固ふたら夫れからは勝手次第輕ハア嬉し
 うござんすと言はして置いて笑をでの由 イ
 ヤ直ぐに亭主に金渡し今の間に埒さそふ氣
 遣ひせずと待つて居や輕そんなら必ず待つ
 て居るぞへ由 金渡ししてくる間どつちへも行
 きやるな女房じやぞ輕夫もたつた三日由 そ
 れ合點輕エ、忝ふござんす歌世にも因果
 な者ならわしを身でや可愛い男にいくせの
 思ひエ、何じやいな置しやんせ平ア、遠は
 花の都の祇園町賑しい事だなア、何んぞ
 やらいつたはい入り相の鐘は廊の夜明けか
 なまはよくいつたはい、い、い、ヤそれは
 そうと妹、かるが此廊へ勤め奉公致してお
 ると聞たがごふぞあいたい物だがチ、幸ひ
 の女中コレちよま物を尋ねたいわ山崎へん

形花体絶の秋の露映

座 日 朝 いし美
いのじ感

・堀傾道・

松竹キヌマ
封切場

から此廊へ勤め奉公に来て居るからと言ふ
 女御存じれいか知つて居ればごふぞ教へて
 くれまへかな 今ま手のはなせぬ事仕て居
 る程に勝手もこで聞て下さんせ サアそふ
 は思つたが勝手元も何だかこてくさいそ
 がしいごふぞ教へてくれるコレ友中 エ、
 しらぬはいな そふすげなく言はずさゝふ
 ぞ教へてくれるコレ友中くくヤアわり
 や妹かるでれへか ヤア兄様が恥かしい
 所で逢ましたご顔を隠せば ア、苦しいな
 いく 關東よりのもごりかけ母人に逢て委
 しく聞た夫のためお主の爲よく賣れた出か
 したくくなア 輕そふ思ふて下さんすりやわ
 しや嬉しいシタガマア悦んで下さんせ思ひ
 がけなふ今宵請出さるゝ答 夫は重疊シテ
 何人のお世話で サアお前も御存じの大星
 由良之助様のお世話で 何んだ由良之助殿
 に請出されるそれは下地からの馴染か 何

のいな此中より二三度酒の相手夫も有らば
 添はしてやる隙がほしくば隙やるご結構過
 た身請け 平、扱ては其方を早野勤平が女
 房と 輕、イ、エしらすじやぞへ親夫のはぢな
 れば明かして何の言いませふ 平、ムンスリヤ
 本心放埒者お主のあだを報する所存はない
 に極つたな 輕、イ、エくコレ兄様有るぞへ
 く 有るごは何か 高ふは言はれぬコレ
 斯々ご瞬げば 平、ム、い、い、輕、あ、平、ムンスリ
 ヤ其文體に見たな 輕、アイ残らず讀んだ其後
 で互ひに見合はす顔と顔それからじやら付
 き出してつい身請けの相談 平、アノ其文體ら
 ず讀だ後で 輕、アイナ 平、ヤ夫で聞へた 妹、逆
 も遁れぬそちが命身共にくれよご抜き打ち
 にばつしご切れば 輕、ちやつご飛退コレ兄様
 わしには何課り勤平と言ふ夫も有りきつご
 二親あるからはこな様のまゝにも成るまい
 受出されて親夫にあはふと思ふがわしや樂

芝居の秋の

最大豪華

十一月の
座

東西大歌舞伎

しみごんな事でもあやまらふ赦して下んせ
 赦してご手を合はすれば平右衛門抜き身を
 捨て可愛や妹わりや何にも知らねへな
 親與一兵衛殿は六月廿九日の夜人に切られ
 てお果なされたはやいやアそれはまあ平
 アーコリヤ〜〜まだ悔りすな。まだ
 後〜悔りの親玉が有るわい、われが請
 出されて添ふと思ふ勤平はな兄様勤平殿
 は平サア勤平はな軽よい女房様でも出来た
 のか〜平エイそんな陽氣な事じやないはい
 軽そんなら勤平様は平サア其勤平は勤平で
 やつぱり勤平だわい軽エイコレ兄様勤平様
 はごふさしやんしたぞいな平ムサア其勤平
 は腹を切つて死だはい軽エイ〜〜ウン
 平チ〜道理だ〜様子咄せばワアコリヤ大
 へんだ妹が目をまはしたア、誰か居ねへ
 か女郎が目をまはした仲居衆〜エイ誰も
 居ね〜待〜チ〜幸ひの手水鉢今水なく

れるぞ待〜〜ソラ水だ、おかるやい
 軽ア〜〜〜平コリアごふだ氣が付
 いたか〜ヨしつかりしろ〜軽チ〜兄様
 平チ〜兄だ〜ソラ平右衛門だ軽チ〜兄さ
 ん勤平様は〜平チエ、情けれ〜まだ尋ぬる
 かい。其勤平は友朋輩の面暗に腹を切つて
 死んだはいやいやア〜〜それはマア
 ほんさかいのコレなふ〜ご取り付いてコ
 レ兄様ごふせふぞいな平チ〜道理だ軽ごふ
 せふぞいなア平チ〜尤だ軽ごふせふぞい
 なア〜〜〜平チ〜道理だ〜〜
 軽はいやいや様子咄せば長い事お勞はしい
 は母者人言ひ出しては泣き思ひ出しては泣
 娘かるに聞かしたら泣き死にするで有る必
 すいふてくれなごのお頼み言ふまいごは思
 へ共進も遁れぬそちが命其譯は忠義一途に
 凝かたまつた由良之助殿勤平が女房ご知ら
 れば受出す義理もなし元來色には猶ふけら

正午から
 五時から
 二回開演
 いづちおもしろ
 いおしほろ

みなさまの 角座
 十一月興行
 新組 織
 成美 團

す見られた状が一大事請け出して差殺す思案の底さ儘に見へたよしそふなふても壁に耳外より洩ても其方が科密書を覗き見たるが誤りころさにやならぬ此場の宜儀入手にかけふより我手にかけ大事を知つたる女妹さて赦されずこそそれを功に連判の數に入つてお供に立ん少身者の悲しさは人に優れた心底を見せれば數には入られぬ聞き譯て命をくれ死でくれ妹ご事を分けたる兄の詞 おかるば始終せき上へ便りのないは身の代を役に立ての旅立か暇乞にも見へそな物も恨んで斗りおりました勿体ないがこゝ様は非業の死でもお年の上勤平殿は三十に成るやならず死ぬるのは嘸悲しかる口惜かる達たかつたで有るふのになぜ達させては下さんせぬ親夫の精進さへ知らぬはわたし身の因果何の生きておりましたお手にかけらばかゝるが前をお恨みな

されませふ自害した其後で首なり死骸なり功に立つなら功にさんせさらばでござんす兄様さ言いつゝ刀取り上ぐる由ヤレ待て暫しこゝむる人は由良之助平ハツッ驚く平右衛門 お輕は放して殺してさ由あせるを押さへてホウウ兄妹共心底見へた兄は東の供を赦す妹はながらへて未來への追善 サア其追善は冥途の供さ由もぎ取る刀をしつかと持添へ夫勤平連判には加へしか敵一人も敵取らず未來で主君に言ひ譯有るまじ其言譯はコリヤ爰にさぐつと突込疊の透間九下には九太夫肩先めはれて七轉八倒九ソレ平右衛門くらひ酔た其客に加茂川でナ平いかじ斗ひまし由水ごうすいをくらばせい平ハア由イケ平してこいなア。

儀太夫海濤本做元 見後其州濤里道具

電話船場
一八六二番

加島屋 新中橋

大阪東區唐物町四丁目御堂筋へ入

